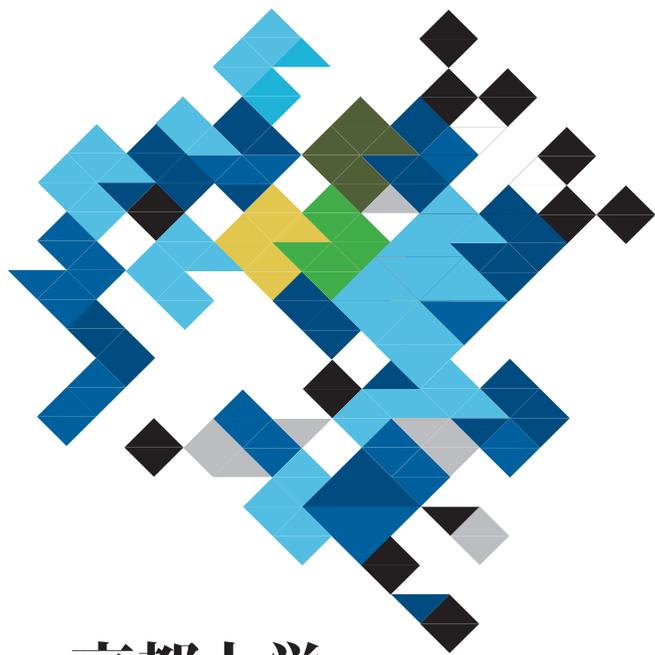


京都大学 人文科学 研究所

要覧

2010
人文科学研究の
フロンティア





京都大学 人文科学 研究所

要覧

2010

• 目次

所長あいさつ	1
人文科学研究所は何をめざすか 21世紀人文科学のフロンティア	2
制度の流れ—沿革	4
研究組織	6
施設	8
研究者一覧	9
共同研究と共同利用	16
共同研究一覧	18
附属研究施設 東アジア人文情報学研究センター	33
附属研究施設 現代中国研究センター	36
附属研究施設 人文学国際研究センター	38
図書室	40
研究・教育経費	42
教育活動と社会貢献	43
出版物・著作	44
講演会・人文研アカデミー	46

所長あいさつ



80年をこえる歴史をもつ人文科学研究所は、人文科学の分野で多くの業績を築いてきましたが、さらに新たな領域、課題の研究を進めるために、研究環境、研究体制を整えることに努めています。

1929年に創立された東方文化学院京都研究所（のち東方文化研究所に改称）、その後設置された西洋文化研究所（旧・独逸文化研究所）、旧・京都帝国大学人文科学研究所の3研究所が統合して、1949年に発足した現在の人文科学研究所は、世界文化に関する人文科学の総合研究を行なうことを目的としてきました。諸分野・諸領域の研究者が共通の問題にアプローチし、文献の会読、フィールドワークそして相互討論を通じて知見を広め考察を深めるという共同研究の方法によって、数多くの業績を重ねてきました。その伝統を現在も引き継ぎながら、人文科学の新たな課題に取り組むと同時に、自然科学・生命科学などとの対話・融合を目指しています。

本研究所には特定の目的をもつ3つの研究センターも付設されており、日本の学术界において重要な役割を果たしています。

本研究所の教員は、研究を基本としながら、教育や社会貢献にも力を注いでいます。文学研究科をはじめとする大学院での教育に協力するとともに、「人文研アカデミー」を開催してさまざまなテーマを扱う講演やレクチャーコンサートなどを通じて、研究成果を社会に還元することに努めています。

さらに、2010年度（平成22年度）からは、「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」という名称で共同利用・共同研究拠点としての活動を開始しています。これは、所外・学外の研究者にも広く研究所の設備、資料を利用していただくと同時に、公募による研究課題の設定、共同研究の推進を図るものです。国立大学の附置研究所の多くが共同利用・共同研究拠点に認定されましたが、人文学の広い分野を対象とする拠点としては、人文科学研究所が全国で唯一のものとなっています。本研究所ではこれまでも、所外・学外の方々に参加していただきながら共同研究を進めてきましたが、それをいっそう推し進め、さらには共同研究の国際化を図っていく所存です。

本研究所の活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、本研究所の折々の活動やさらに詳しい説明などについては、Webサイトをご覧ください。よろしくお願いいたします。

【京都大学人文科学研究所Webサイト】 <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

2010年12月20日

京都大学人文科学研究所・所長 水野直樹

* 2011年4月より、岩井茂樹教授が所長を務める予定です。



21世紀人文科学のフロンティア

現在、人文科学は大きな転機を迎えている。ヒトゲノムの解読をはじめとする生命科学の発展や、認知科学、情報科学の進歩は、人間についての認識を大きく変えつつある。その一方で、環境問題が端的に示しているように、人間と自然の関係を問い直すことも要請されている。また、これまで世界の諸文化を考察するさいの枠組みはおもに国民国家によって規定されてきたが、この枠組みの問題性もあらわになってきている。こうしたなか、人文科学の全領域で新たな問題群が登場し、従来の専門分野の設定やそこで前提とされてきた視点や方法が根本的な再検討を迫られることとなったのである。しかし人文科学に期待されている役割も大きい。とくに近代世界を形作ってきた諸価値や技術的達成が内包する問題が噴出している今日、人間の生き方とその歴史的展開を明らかにし、そのあるべき姿を研究する人文科学の重要性はますます増大しているといえる。

京都大学人文科学研究所は、80年以上にわたって蓄積されてきた成果の上に立ちつつ、現代の人文科学が直面する諸課題に取り組もうとしている。その根幹をなすのが、共同研究とフィールドワークである。

共同研究 — 知の協働

テーマごとに研究者を組織してすすめる共同研究は、いまや各分野でひろくおこなわれている。しかし、毎週あるいは隔週、異なった分野の班員が集まってテキストの解読や研究報告、討論を重ね、3年から5年の期間終了後に、論文集や校訂テキスト、訳注などを公刊して研究成果を社会に還元する——こうした方法が人文科学や社会科学の分野においてきわめて有効であることを国際的に認知させたのは「人文研の共同研究」である。

共同研究は現在も人文研の研究活動の主軸である。これまでは研究所スタッフ、京都大学内の研究者、そして主として関西地方在住の研究者が参加して運営されてきたが、近年は海外の研究者も多く参加し、国際共同研究の様相を帯びる研究班も増えている。人文科学研究所は今後も共同

研究の体制を強化し、広い視野からの議論と綿密な分析を重ねあわせることで、新たな研究成果を生み出すことを目指している。

また、文化そのものが全地球的な情報化社会の到来のなかで変化しつつある今日、人間の文化を対象とする人文科学研究所の共同研究においても、新たな手段、方法が模索される必要がある。現在、われわれは実験的な共同研究のあり方を追求し、研究組織と方法、および課題設定の両面から、新たな時代の共同研究のスタイルを作り上げようとしている。

フィールドワーク — 知の探査

わが国における組織的な海外学術調査は、旧東方文化研究所や統合後の人文科学研究所によって切り拓かれてきたといっても過言ではない。そこでは戦前、戦後にわたって、中国、西南アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地域において学術調査の経験と実績が積み重ねられてきた。

現在では、海外でのフィールドワークや文献調査が日常のかつ多様な仕方でおこなわれるようになったため、大規模な調査隊の派遣というスタイルはとらず、海外の研究者との国際的な共同プロジェクトの一環としてフィールドワークをおこなうことが多い。また、歴史的な文献資料についての知見と最新の現地調査の成果を相補的に用いて、文明地域の研究を進展させようとする研究手法も模索されている。いずれにしても、そこでは調査、発掘・収集、分析、精読といったさまざまな研究プロセスの有機のかつ独創的な結合をつうじて、真に国際的水準に立つ研究成果を上げることが目指されている。

共同研究とフィールドワークは、参加する個の知性が活性化され、そこに起こる共鳴や反撥のなかで、新たな視点や問題の発見がなされる場である。人間社会の直面するさまざまな問題が国境をこえて全球化し、多方面からの接近が求められている今日、この二つの方法をさらに発展充実させることが人文科学研究所の課題である。



制度の流れ—沿革

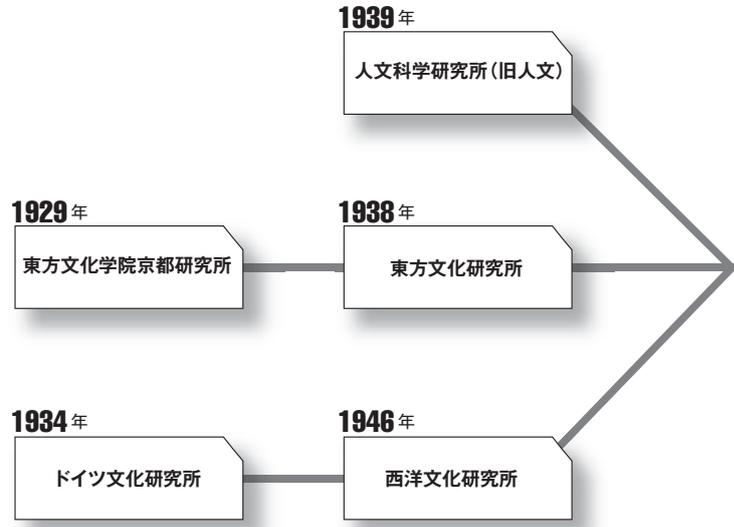
現在の京都大学人文科学研究所は、1939年に設立された同名の研究所（旧人文）と、東方文化研究所及び西洋文化研究所が合体して、1949年1月に発足した研究機関であり、3研究所の業績を継承しつつ、世界文化に関する人文科学の総合研究を行うことを、その目的としている。

東方文化研究所

統合された3研究所の中で最も歴史が古い東方文化研究所は、1929年、中国文化を中心とした学術研究を目的として、外務省から助成金をうけ、東京と京都に設立された東方文化学院の京都研究所の後身である。発足当初は研究員4名、助手4名にすぎず、所屋も京都大学文学部陳列館の一隅を借用していたが、1930年11月、北白川小倉町50番地（現東小倉町47番地）に新所屋が完成した。現在も本研究所附属の東アジア人文情報学研究センターとして使用されている建物がそれである。この建物は、研究所評議員濱田耕作の創意をもとに、東畑謙三氏が設計したスパニッシュ・ロマネスク様式のもので、今日に至るまで世人の注目を集めている。1938年4月、東方文化学院が改組され、京都研究所は独立して東方文化研究所と改称された。この頃には、研究員、副研究員、助手、嘱託員など30名以上の所員が、経学・文学、宗教、天文・暦算、歴史、地理、考古の6研究室に所属する体制も整っていた。なお東方文化学院時代の所長は狩野直喜であり、東方文化研究所時代の所長は松本文三郎と羽田亨であった。

西洋文化研究所

一方、西洋文化研究所は、1934年に民間団体として設立されたドイツ文化研究所（吉田牛ノ宮町1番地）を、1946年に改組した研究機関で、数名の研究員を委嘱して、イギリス・アメリカ・ドイツ等の文化を研究することになっていた。しかし、3000冊をこえる書籍を含む一切の設備が、占領軍に接収されたため、その活動を停止せざるを得ず、結局土地所屋は接収解除とともに京都大学に寄付され、すでに発足していた現在の人文科学研究所の所属に帰した。なお、この所屋も村野藤吾氏の設計にかかる特色ある建物であったが、維持管理をはじめとした種々の問題のため、1974年に残念ながらとりこわされた。

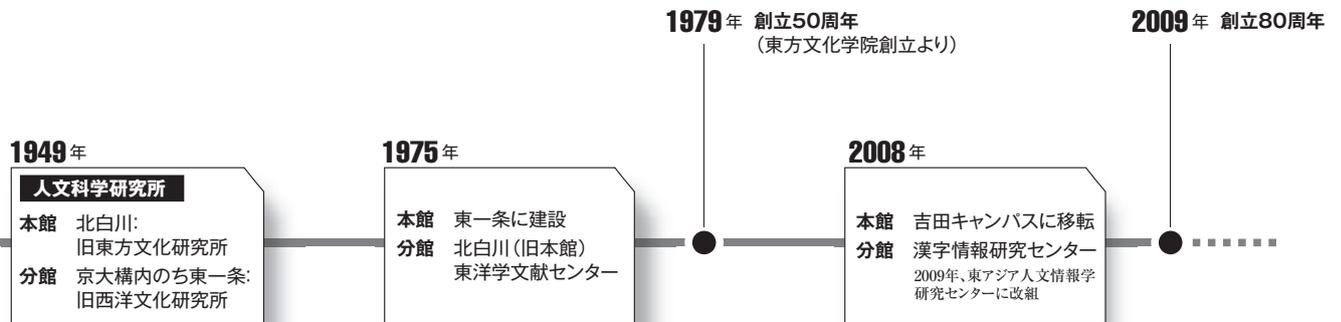


旧人文科学研究所

最後に旧人文科学研究所は、東亜に関する人文科学の総合研究を行う目的で、京都大学の附属研究所として1939年に設立された。翌年より産業経済・社会および教育・文化交渉史などからなる研究体制が整い、京都大学の文・法・経済・農の各学部の支援をうけながら、教授1名、助教授5名、兼任所員13名で発足した。所屋には大学本部構内の中央図書館西北の木造2階建の建物（現在ではとりこわされてしまった）が充てられた。なお統合に至るまでの所長は、小島祐馬、高坂正顕、安部健夫であった。

3研究所の統合と人文科学研究所の発足

さて、旧人文科学研究所を中核として、東方文化研究所と西洋文化研究所を統合しようという動きは1946年末にはじまる。翌年に入り、西洋文化研究所を解散し、建物・設備を京都大学に寄付しようとする同研究所理事会の意向をうけ、当時の京都大学総長鳥養利三郎は、東方文化研究所長羽田亨らと協議して旧人文と東方文化、西洋文化を一つにした大研究所設立の実現に動きだした。1948年4月、まず東方文化研究所が外務省から文部省（京都大学）の所管にうつされ、ついで同年11月20日3研究所を代表する3所員による公開講演を契機として事実上の統合が成立し、翌年、11部門、教授11名、助教授14名、助手19名からなる新しい人文科学研究所が正式に発足した。その後、社会人類学（1959年）、西洋思想（1964年）、日本文化（1969年）、現代中国（1975年）、比較文化（客員1978年）、宗教



史(1980年)、比較社会(1981年)、日本学(客員1985年)、言語史(1988年)の各部門が増設された。なお、比較社会部門、日本学部門は、客員部門として外国人を招聘して運用されることになった。このほか1965年には附属施設として東洋学文献センターが設けられた。1979年には東方文化学院が創立されてから満50周年を迎えたため、11月9日に創立50周年記念式典が催され、詳細な沿革を誌した『人文科学研究所50年』が出版された。

新たな研究体制へ

2000年4月、人文科学研究所はいっそうの発展を目指し、また時代の要請に応えるために、全面的な改組を行なった。この結果、従来の小部門の制度を改め、5部門、1附属研究施設からなる大部門制をとることになった。すなわち、京都大学内の先端科学や学外の芸術活動と連携しつつ、新たな文化研究の方法をさぐる「文化研究創成部門」、諸文化の生成、継続、消滅の動態を新たな視点から研究する「文化生成部門」、非言語的素材を通して中国文化のありようを考察する「文化表象部門」、漢字文献の解読を通して中国文化のありようを検討する「文化構成部門」、多文化間の人、物、情報の連関事象を人類史的にとらえなおす「文化連関部門」の5部門である。また、本研究所の対外展開を漢字情報のデジタル化により支えるものとして、「東洋学文献センター」を拡充し、情報科学研究機能も加え、「漢字情報研究センター」に改編した。

いずれの部門でも所員は個人研究のテーマを持つと同時に

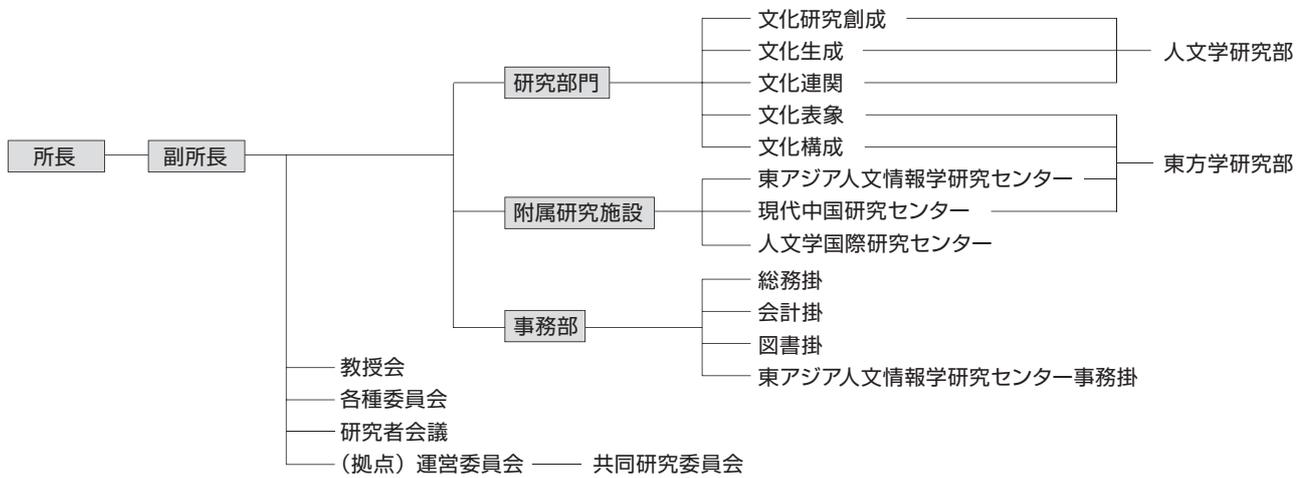
に共同研究に参加する義務を負う。本研究所の一つの特色をなす共同研究は、すでに東方文化研究所、旧人文科学研究所時代からの歴史を持つが、特に統合・改組以後は部・部門相互間、あるいは学際的な共同研究を組むことによって、学問が過度に専門化する弊害を防ごうとしている。本研究所はこれまで、古典学、歴史学、実地調査を柱に、緊密な人間関係のもと、国際性、持続性の高い共同研究を展開し、個人研究においても、既成の学がとりあげなかった実験的課題に挑戦してきた。その過程で深められた、人文科学的関心と東方学的関心とは、学の範疇としては次元を異にするものの、相互に刺激を与えつつ共存し、当研究所の創造力の源泉をなしてきた。この態勢を新機構でも活かすため、運営内規上の工夫として、旧日本部、西洋部を人文学研究部(文化研究創成、文化生成、文化連関の3研究部門)に、旧東洋部を東洋学研究部(文化表象、文化構成の2研究部門と漢字情報研究センター)に再編した。もちろん共同研究の多くは、両研究部にまたがって展開している。

2008年5月に人文科学研究所は吉田キャンパス内の新本館へと移転し、新たな研究拠点として現代中国研究センターと人文学国際研究センターが発足した。また2010年には文部科学大臣の認可を得て、全国共同利用・共同研究拠点としての活動を開始し、公募により新たな共同研究の領域・課題を開拓してゆくとともに、施設や所蔵資料、データベースを広く内外の研究者に提供することに取り組んでいる。



研究組織

2000年4月、人文科学研究所は1949年の設置以来半世紀以上にわたって続けてきた小部門制から大部門制に移行した。日本部、東洋部、西洋部の三部に分れていた17小部門+1附属施設を、5大部門+1附属施設に再編し、研究運営の便宜上これを人文学研究部と東方学研究部の二部に分けた。その後、二つの附属研究センターを置き、現在に至っている。



文化研究創成部門

人間の文化を構成するのは、生物としてのヒトであり、そのヒトから成る家族や民族などの集団であり、会社や国家などの社会組織である。

文化研究創成とは、そうした文化についての研究のあり方を、既存の研究分野やディシプリンにとらわれることなく、根底から見直したうえで、新たな研究視角の提示や研究方法の創出を目指すものである。

この課題を遂行するため、本部門では宗教や芸術研究などの多岐の分野を含む人文科学と社会科学との連携というにとどまらず、人文系科学と自然科学といった境界を越えて、生命科学などの先端諸科学との対話を可能にするために学際的に編成されている。

本部門は、他の研究部門の成果を統合する結節環としての機能も担っているが、さらには研究成果をいかに国際的に発信し社会的に還元していくのかという課題に対しても、客員部門や人文学国際研究センターとともに積極的に取り組んでいる。

文化生成部門

文化が生まれ、発展し、継承されていくメカニズムの解明なしには文化の本質や根源に迫ることはできないし、錯雑化した現代の文化状況を分析し、そこから将来への展望を切り拓くこともできない。

しかしながら、文化といってもそこには政治・経済からはじまって文学・思想・美術など多種多様な領域があり、それぞれの文化領域を捉えるための方法や視角は、けっして一元的ではありえない。さらにまた文化が生まれ、変容し、伝承されていく、その様態は時代や地域において著しく異なっており、その時間と空間の違いに起因する多様性を究明することにこそ、文化研究の醍醐味があるとともに困難さも潜んでいる。

こうした時代や地域そして分野によって異なる文化のあり方を、その固有性において把握しつつ、同時に固有性を越えた文化における普遍性とは何か、を探求して文化の本質を明らかにすることを課題として、本部門では文化生成のメカニズムの析出と文化創造への提言を進めている。

文化連関部門 ————— 文化はひとたび生まれると、その時代や空間を超えて移動し、交わることによって相互の文化は異なった要素を組み込んだ文化としての生命をもつ。こうした異文化接触によって人類の文明は形成されてきた。

そして、21世紀に入って更に加速化してきたグローバル化の浸透によって、経済や政治そして情報は世界的な同時性をもって動き、社会も連動性をもって推移しているように見える。しかしながら、そこでは連動性と共に地域的な生活様式や文化における固有性を保持しようとするベクトルもまた作用している事態も看過することはできない。こうした文化の流動性と持続性とのせめぎ合いの中に現れる異文化間交渉のあり方は、時代に応じて大きく変容してきたものであり、長いタイムスパンの中でその実相を解明していかなければ、眼前の趨勢をも見誤ることになりかねない。

本部門では、文化生成部門の成果を踏まえ、異文化間接触で生じる事態の考察を通じて、グローバル化時代における学知のあり方を探求している。

文化表象部門 ————— 継続性と広域性を兼ね備えた東アジアの文化体系について、時間と空間の両面に関わる文化の実相を、文献研究と現地調査の二重証拠法により総合的に研究する。人間の創造した文化は、そのエッセンスをなす部分が後世に伝えられるに際し、文学や思想などのように文字を介するもののほか、文字以外の形態によって受け伝えられる分野も相当の割合を占めている。しかも文字を介した文化伝承の場合に比べ、それ以外の媒体で伝承される文化については、その中に込められた思考や価値観を抽出することは容易ではなく、それぞれの分野ごとに独自の方法を用意する必要がある。

本部門では、主たる対象を中国を中心とする東アジア文化圏に定め、考古文物、出土文献、科学技術、図像芸術、礼制習俗など五つの分野に重点を置いて研究対象の歴史的変遷を記述するばかりでなく、形象化して表出された文化の諸要素が、東アジア文化圏のなかで如何なる位置を占め、如何なる機能を果たしてきたのかについても探求する。

文化構成部門 ————— 本部門は、文化表象部門との協同のもとに、おもに中国を中心とする東アジア地域を対象として、その文化体系の全体像を解明する研究の一翼を担う。文化表象部門が非言語的な文化現象を手がかりに文化観念の側面にまで分析を進めるのとは対照的に、本部門ではまず言語を通じて表出される文化営為に着目して、言語史、宗教史、思想史、制度史、新学史など五つの分野から文化意識の形成を時系列的に追究していくとともに、その文化意識の表出としての文化現象にまで考察の対象を広げることによって、意識から表象へというベクトルに沿いながら、文化体系の深層から表層にいたる成り立ちを構造と動態の両面から複合的に解明する。

さらに言語史、制度史の分野では、漢字情報研究センターに協力して全国漢籍データベース、人文科学研究所蔵拓本データベースなどの構築を進める。また新学史分野は現代中国研究センターとともに、人文学とくに歴史学の視角から現代中国の深層構造を分析する。



施設

研究所本館は、2008年5月、東一条北西角から吉田本部構内に移転した。旧工学部5号館を全面改修した新たな本館には、セミナー室・図書室・書庫などの各種スペースが設けられている。

本館

人文科学研究所本館は2008年5月、吉田本部構内の北、今出川通りに面した新たな建物に移転した。地下1階、地上4階建ての建物のうち、地下部分は工学部が使用し、地上部分の一部は工学部講義室および数理解析研究所研究室となっている。

東一条の西北角にあった旧本館は1975年に建てられたが、30年が経過して老朽化し耐震補強が必要となっていたこと、書庫が手狭になったこと、大学本部から移転の要請があったことなどから、本部構内への移転が決められた。移転にいたるまでには、旧工学部5号館を全面改修して研究所にふさわしい建物にかえるための検討、改修案の作成が数年にわたって続けられた。

毎年増えていく図書資料を収蔵する書庫を十分に確保しながら、東アジア人文情報学研究センターを除く全教員の研究室、事務室、図書室をはじめ、研究会を開催するためのセミナー室、特別研究員・外国人研究員などの研究室、新たな研究に必要なスペースなどが設けられている。また、研究所の附属施設である現代中国研究センター、人文学国際研究センターも入っており、今後の新たな研究を支える大きな基盤として機能している。



新本館

分館

北白川の閑静な住宅街にある分館。東方文化学院京都研究所屋として1930年11月竣工。設計は東畑謙三氏。スペイン僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した美しい建物で、文化庁の登録有形文化財に指定されている。写真中央の建物（尖塔の右側）が書庫、手前に研究棟を持つ。敷地4,228平方メートル、建坪2,712平方メートル。京都の中国学研究の象徴として内外に知られており、現在は東アジア人文情報学研究センターが使用している。



中庭から尖塔を見る。尖塔の右側が書庫



研究者一覽

(職階ごとの50音順)

【凡例】

- ① 学位 (取得大学)
- ② 専門分野
- ③ 個人研究のテーマ、もしくは最近の研究領域
- ④ 学内での講義科目の1例。題目のあとに (研究科/学部名)

教授

あきはら たつろう
浅原達郎
文化表象部門



- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 先秦時代の金文
- ④ 中国古代の暦 (全学共通科目)

いなば みのる
稲葉 稜
文化表象部門
人文学国際研究センター (兼任)



- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 中央アジア史・東西交渉史
- ③ イスラーム東漸史の研究
- ④ 初期イスラーム時代アフガニスタン史研究
(文学研究科/文学部共通)
インド洋世界論
(アジア・アフリカ地域研究研究科)

い な み り よ う い ち
井波 陵一
東アジア人文情報学研究センター



- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 中国文学
- ③ 清代の文化と社会
- ④ 漢籍目録を「読む」 (文学研究科)



い わ い し げ き
岩井 茂樹
文化表象部門
東アジア人文情報学研究センター (兼任)
現代中国研究センター (兼任)

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国近世史、東アジア関係史
- ③ 13世紀~20世紀中国の財政史研究、
中国近世の法制と裁判文書研究、
東アジアの朝貢と互市の研究
- ④ 17世紀東アジアにおける儀礼と通商
(文学研究科)



お お う ら や す し げ
大浦 康介
文化生成部門

- ① 第3課程博士 (パリ第7大学)
- ② 文学・表象理論
- ③ 性表象の研究、虚構性の研究
- ④ フィクション論の問題圏
(文学研究科/文学部共通)



お か む ら ひ で り
岡村 秀典
文化表象部門
東アジア人文情報学研究センター (兼任)

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国考古学
- ③ 古代中国の考古学的研究
- ④ 漢鏡の研究 (文学研究科/文学部共通)



か ご た に な お と
籠谷 直人
文化連関部門
現代中国研究センター (兼任)

- ① 経済学博士 (大阪市立大学)
- ② 日本経済史
- ③ 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク
- ④ 日本貿易論 (経済学研究科)



きん ぶんきょう
金 文京
文化構成部門

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 中国文学
- ③ 中国近世戯曲・小説
- ④ 漢文講読 (文学研究科/文学部共通)



たかた ときお
高田 時雄
文化構成部門
東アジア人文学情報学研究センター (兼任)

- ① 第3課程博士 (パリ、社会科学高等研究院)、
文学博士 (京都大学)
- ② 言語史、敦煌学
- ③ 敦煌写本の言語史的研究
- ④ 演習「旧鈔本翰苑」(文学研究科)



たけがわ やすこ
竹沢 泰子
文化連関部門

- ① Ph. D. (ワシントン大学)
- ② 文化人類学 アメリカ研究
- ③ 人種・エスニシティ論、移民・マイノリティ研究
- ④ 社会学特別講義 (人種・エスニシティ論)
(文学研究科)



たけだ ときまさ
武田 時昌
東アジア人文学情報学研究センター

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 中国科学史・科学思想史
- ③ 中国伝統科学の思想史的考察
- ④ 中国哲学史特殊講義
(文学研究科/文学部共通)



たなかまさかず
田中 雅一
文化研究創生部門
人文学国際研究センター (兼任)

- ① Ph. D. (ロンドン大学)
- ② 文化人類学・南アジア民族誌
- ③ セクシュアリティ・暴力・宗教・軍隊
- ④ 文化行為論、文化人類学演習
(人間・環境学研究科)



とみながしげき
富永 茂樹
文化生成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 知識社会学
- ③ フランス革命と近代的主体の成立
- ④ トクヴィル・モメント (5) ——群れの登場
(文学研究科/文学部/教育学部共通)



とみや いたる
富谷 至
文化構成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国法制史、簡牘学
- ③ 魏晋南北朝刑罰制度の研究
- ④ 簡牘研究 (文学研究科/文学部共通)



ふじい まさと
藤井 正人
文化研究創成部門

- ① Ph. D. (ヘルシンキ大学)
- ② インド学、サンスクリット文献学
- ③ ヴェーダ文献の生成と伝承の研究
- ④ プラーフマナ文献研究
(文学研究科/文学部共通)



ふなやま とおる
船山 徹
文化構成部門

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 仏教学
- ③ インド・中国における仏教の学術と実践
- ④ 中国仏教思想典籍史
(文学研究科/文学部共通)



みずの なおき
水野 直樹
文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 朝鮮近代史・東アジア関係史
- ③ 植民地期朝鮮の支配政策と朝鮮社会の対応
- ④ 在外朝鮮人の近現代史 (文学研究科)



むぎたにくに お
麥谷邦夫
 文化構成部門

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② 中国思想
- ③ 道教思想
- ④ 道教思想資料
 (文学研究科/文学部共通)



もり ときひこ
森時彦
 文化構成部門
 現代中国研究センター (兼任)

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 近代中国の綿紡績業
- ④ 中国社会の近代化過程
 (文学研究科/文学部共通)



やまむろしんいち
山室信一
 文化連関部門教授

- ① 博士 [法学] (京都大学)
- ② 近代法政思想史
- ③ 戦争と平和をめぐる法政思想の連鎖研究
- ④ 第一次世界大戦と現代社会 (全学共通講義)



よこやまとし お
横山俊夫
 文化研究創成部門
 大学院地球環境学堂 (両任)

- ① 哲学博士 (オックスフォード大学)
- ② 文明学、前近代日本文明史
- ③ 江戸期日本の文明史的研究
- ④ 地球文明論 (大学院地球環境学舎)



いけだ たくみ
池田巧
 文化構成部門
 東アジア人文情報学研究センター (兼任)
 現代中国研究センター (兼任)

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② シナ・チベット語方言史
- ③ 川西走廊の漢藏諸語の記述研究
- ④ 中国語方言の諸問題
 (文学研究科/文学部共通)



いし い み ほ
石井美保
 文化研究創生部門

- ① 博士 [人間・環境学] (京都大学)
- ② 文化人類学、アフリカ・南アジア研究
- ③ 宗教、呪術、憑依に関する人類学的研究
- ④ なし



いしかわよしひろ
石川禎浩
 現代中国研究センター

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 中国共産党史の研究
- ④ 中国現代史の諸資料
 (文学研究科/文学部共通)



いとうじゅんじ
伊藤順二
 文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② コーカサス近代史
- ③ 露土戦争とグルジア社会
- ④ コーカサス近代史と義賊/匪賊
 (文学研究科/文学部共通)

准教授



いわき たくし
岩城卓二
文化生成部門

- ① 博士 [文学] (関西大学)
- ② 日本近世史
- ③ 日本近世社会解体過程の研究
- ④ 日本史学特殊講義
(文学研究科/文学部共通)



ウィッテルン クリスティアン
WITTERN, Christian
東アジア人文情報学研究センター

- ① 哲学博士(Ph. D.) (ゲッティンゲン大学)
- ② 人文情報学、中国禅仏教
- ③ 仏教研究知識ベース —— 禅仏教を例として
- ④ 東アジア人文情報学 (人間・環境学研究科)



えん こうせん
袁 広泉
現代中国研究センター

- ① 学術博士 (神戸大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 中国現代教育史
- ④ なし



おうじけんた
王寺賢太
文化生成部門

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② フランス文学・思想/社会思想史
- ③ 近世ヨーロッパの歴史叙述と政治思想
- ④ デイドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』と近世ヨーロッパの拡大 (文学研究科/文学部共通)



おかだ あけお
岡田暁生
文化研究創成部門

- ① 文学博士 (大阪大学)
- ② 西洋音楽史
- ③ 第一次大戦と音楽史
- ④ シェーンベルクと表現主義 (文学研究科)



かとうかずと
加藤和人
文化研究創成部門

- ① 理学博士 (京都大学)
- ② 科学コミュニケーション論・生命倫理
- ③ 現代社会における生物学・生命科学
- ④ 生命科学と社会 (生命科学研究所)



こがちりゅういち
古勝隆一
文化構成部門

- ① 博士 [文学] (東京大学)
- ② 中国古典学
- ③ 中国注釈学史研究
- ④ 魏晉思想文献を読む (文学研究科/文学部共通)



こせき たかし
小関 隆
文化連関部門

- ① 博士 [社会学] (一橋大学)
- ② イギリス・アイルランド近現代史
- ③ 第一次大戦期のアイルランド問題
- ④ イギリス史における第一次大戦——アイルランドから考える (文学研究科/文学部共通)



たかぎ ひろし
高木博志
文化生成部門

- ① 博士 [文学] (北海道大学)
- ② 日本近代史
- ③ 近代天皇制の文化史的研究
- ④ 近代古都論 (文学研究科/文学部共通)



たかしな えりか
高階絵里加
文化連関部門

- ① 博士 [文学] (東京大学)
- ② 日本近代美術史
- ③ 近代日本の美術と西洋
- ④ 美術のなかの日本と西洋 (全学共通科目)

ついきこうすけ

立木康介

文化生成部門

- ① 博士 [精神分析] (パリ第8大学)
- ② 精神分析
- ③ 精神分析的知の思想史的位置づけ
- ④ なし



みやけ きよし

宮宅 潔

文化構成部門

東アジア人文情報学研究センター (兼任)

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国古代史
- ③ 秦漢制度史の研究
- ④ 東アジア文献学 (人間・環境学研究科)



やぎ たけし

矢木 毅

文化表象部門

東アジア人文情報学研究センター (兼任)

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 東洋史 (朝鮮中世近世史)
- ③ 朝鮮前近代における政治史及び政治制度史の研究
- ④ 東洋史学特殊講義 (文学研究科/文学部共通)



やすおかこういち

安岡孝一

文化生成部門

東アジア人文情報学研究センター

- ① 工学博士 (京都大学)
- ② 人文情報学
- ③ 文字コード論
- ④ 文字コードの歴史 (人間・環境学研究科)



あんどうふさえ

安藤房枝

文化表象部門

東アジア人文情報学研究センター (兼任)

- ① 修士 [文学] (名古屋大学)
- ② 東洋美術史
- ③ 中国北魏時代の仏教石窟寺院
- ④ なし



い すんよぶ

李昇燁

文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 朝鮮近代史
- ③ 朝鮮在住日本人社会の研究
- ④ 朝鮮語文献講読 (文学研究科/文学部共通)



おの であらしろう

小野寺史郎

現代中国研究センター

- ① 博士 [学術] (東京大学)
- ② 近代中国史
- ③ 近代中国ナショナリズム研究
- ④ 中国語講読 (文学部)

かじはら み え こ

梶原三恵子

文化研究創成部門

- ① Ph.D. (ハーバード大学)
- ② インド学、サンスクリット文献学
- ③ 古代インド家庭儀礼研究
- ④ サンスクリット (文学研究科/文学部共通)

助教



きくち あきら
菊地 暁
文化連関部門

- ① 文学博士 (大阪大学)
- ② 日本民俗学
- ③ 近代日本における民俗誌的实践の総合的研究
- ④ 民俗学 (全学共通科目)



きむ しひょん
金 志珙
文化構成部門

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国道教
- ③ 中国六朝隋唐期の宗教研究
- ④ なし



くさか わたる
日下 渉
文化連関部門

- ① 修士 [比較社会文化] (九州大学)
- ② 政治学、フィリピン研究
- ③ フィリピンにおける差異と共同性・公共性の構築
- ④ なし



くぼ あきひろ
久保 昭博
文化生成部門

- ① 第3課程博士 (パリ第3大学)
- ② フランス文学・文学理論
- ③ 文学ジャンル論、文体論、フィクション理論
- ④ 講読——レーモン・クノー『はまむぎ』を読む (文学部)



くろいわやすひろ
黒岩 康博
文化生成部門

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 日本近代史
- ③ 戦間期日本の大衆社会・文化
- ④ 19世紀の歴史都市 (全学共通科目)



こいけいくこ
小池 郁子
文化研究創成部門
人文学国際研究センター (兼任)

- ① 博士 [人間・環境学] (京都大学)
- ② 文化人類学
- ③ アフリカ系アメリカ人の宗教・文化実践、黒人運動
- ④ 現代人類学 (全学共通科目)



たなか ゆりこ
田中 祐理子
文化研究創成部門

- ① 修士 [学術] (東京大学)
- ② 近代医学思想史・表象文化論
- ③ 「細菌」の表象史
- ④ 西洋史仏書講読 (文学部)



なが たともゆき
永田 知之
東アジア人文情報学研究センター

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国古典文学
- ③ 唐宋の文学批評
- ④ 中国文化史の諸相 (全学共通科目ボケゼミ)



ふじいのりゆき
藤井 律之
文化構成部門
東アジア人文情報学研究センター (兼任)

- ① 博士 [文学] (京都大学)
- ② 中国古代中世史
- ③ 中国古代中世の官制史
- ④ なし



みや のりこ
宮 紀子
文化構成部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② 中国文学
- ③ モンゴル時代の政治と文化
- ④ なし



むか い ゆうすけ
向井 佑介
東アジア人文情報学研究センター

- ① 修士[文学] (京都大学)
- ② 考古学
- ③ 中国中世の考古学研究
- ④ なし



もり おかともひこ
守岡 知彦
東アジア人文情報学研究センター

- ① 情報科学博士 (北陸先端科学技術大学院大学)
- ② 多言語情報処理、人文情報学
- ③ 文字オントロジーに基づく文字処理、
一般キャラクター論
- ④ なし



やまざき たけし
山崎 岳
東アジア人文情報学研究センター

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 東アジア地域社会史
- ④ なし

客員

ヴァーતા シルヴィオ
VITA, Silvio
イタリア国立東方学研究所所長

- ① 文学博士 (イタリア国立ナポリ東洋大学)
- ② 東アジア宗教史
- ③ 大蔵経編纂の歴史・近代日本の仏教と知識人・
日欧交渉史
- ④ なし

ジャック・ベノワ
JACQUET, Benoit
フランス国立極東学院京都支部長

- ① 工学博士 (京都大学・パリ第8大学)
- ② 建築史・意匠
- ③ 日本近現代建築史・建築論
- ④ なし



共同研究と共同利用

世界の注目を集める共同研究は、本研究所に始まった。現在は27の研究班が開かれている。2010年度からは共同利用・共同研究拠点としての活動を始め、共同研究の公募や所蔵資料・データベースの更なる充実を図っている。



研究班開催風景

共同研究の歩みと現状

東方学研究部の前身である東方文化学院京都研究所は、中国文化の真髄を理解するための純学問的研究をめざして設立された。昭和初期、日中関係の悪化をはじめ、周囲の状況がそれと逆行してゆくなかで、時流に流されぬ学問的遺産が蓄積されていったのは、先学所員たちのなみなみならぬ努力の賜物であった。

ここではまず、基礎的な文献資料の収集と整理、その校訂と索引作成などが着手され、それらを土台として重要文献の会読がなされた。ここでいう会読とは複数の専門家による高い水準の共同研究にほかならず、その過程において論文や研究報告がものされ、会読の結果、校訂と訳注が生まれ、場合によって索引が作られる。現在の東方学研究部の共同研究班の多くは、こうした原典会読方式のうえにたち、自由討論を加えるスタイルをとっている。

共同研究の会読方式のほかに、東方学研究部の研究体制のいまひとつの特色として共同研究室がある。東方文化学院の初期においては、所員はあらかじめ認められた研究題目に従って、3年ごとに研究報告を提出し、所長、評議員（指導員）の審査をうけて公刊する個人研究が中心であった。しかし、経学文学、歴史、宗教、考古美術、天文暦算、歴史地理の6研究室において、それぞれの分野での会読が定着してゆくと、その効率的な推進のためにも研究室の果す役割が増大していった。こうして1938年の東方文化研究所改組以後は、個人研究の指導員制度をやめ、研究室単位の研究体制に比重がうつる。

現在でも各共同研究室には関係文献や工具書類が常備されていて、東方学研究部共同研究班のいわば根拠地となっている。会読を軸とした共同研究は正式には1935年から、経学文学と天文暦算の研究室ではじまった。前者の成果は『尚書正義定本』に、後者は『漢書律暦志の研究』として世に問われた。経学文学研究室ではほかに元代の戯曲である「元曲」の研究を進め、さらに戦後には長い歳月をかけて全12冊におよぶ『唐代研究のしおり』を刊行する一方、白居易、李商隠などいくつかの作品を会読してきた。のちに科学史と改称された天文暦算研究室の活動は戦後とくに盛んで、『天工開物』の研究をはじめ、時代時代の重要文献を会読しつつ数冊の中国科学技術史の論文集をまとめた。近年では、新発見の出土資料を使った中国医学の研究が行なわれた。

歴史研究室では殷代甲骨文字、難解な元代の法典・行政文書集『元典章』、膨大な量の清代の『雍正硃批諭旨』などの会読と研究が行なわれてきた。また旧現代中国部門の設置以来、五四運動から毛沢東時代まで研究の幅を広げている。歴史地理は『水経注』の研究のほか、居延漢簡、石刻資料、都市研究などを手がけ、宗教では六朝から唐代に重点をおき、儒・仏・道教それぞれの専門知識を必要とする難解な諸文献を解読しつつ、『肇論研究』などをまとめた。考古美術が中国・ガンダーラ仏教寺院の調査とともに中国出土文物の先端的研究を行なっていることは広く知られるところであろう。

1949年の統合のあと、旧日本部と旧西洋部はそれぞれ

一部一班のかたちで共同研究をスタートした。日本部柏祐賢の「日本の近代化」班と西洋部桑原武夫の「ルソー研究」班がそれである。この日本近代と18世紀フランスは、今日でも依然として両部の主要な研究対象としてとりあげられている。共同研究は所員を中心に所外の専門研究者の協力をえて、3年のサイクルで成果をまとめてゆく方式のもので、つぎつぎと目ざましい業績がだされたこともあって、人文科学研究所といえば共同研究、というイメージを人びとにうえつけた。専門の枠にとらわれず、自由な共同討議を通じて新しい問題をほりおこす方法は、人文科学の共同研究のあり方のひとつのモデルともなったのである。やがて旧日本部は、思想・文化に重点をおく通称「意識」班と、経済・社会をとりあげる「機構」班にわかれ、それぞれ明治維新、米騒動を研究して報告書をあらわした。一方旧西洋部も、しだいに研究領域をひろげ、社会人類学などの部門を増設して内容を多彩にしてゆく。

こうして1969年までに、両部とも思想、文化、社会の三部門ずつをそろえ、旧日本部では江戸時代末期の文化や現代の家族問題、旧西洋部では中世社会史や20世紀の政治史などの共同研究班も組織されるようになった。1981年度から外国人客員部門として増設された比較社会部門及び1985年度増設の日本学部門は、各国の研究者たちが直接本所の共同研究に一定期間、しかも継続的に参加できる道をひらいた。

2000年に研究所の改組が行なわれ、3部制を2部制（人文科学研究部・東方学研究部）に改めたが、それにともない日本・東洋・西洋などの各地域を対象とする共同研究だけでなく、「第一次世界大戦」や「人種表象」など地域横断型の共同研究が増えつつある。

また、2010年からは共同利用・共同研究拠点の活動が開始されたが、研究課題・責任者を公募で選ぶ共同研究が組織され、従来型の共同研究でも参加者を公募することによって研究者コミュニティに開かれた運営をすることに努めている。

共同利用・共同研究拠点

人文科学研究所では、文部科学大臣の認可を受けて、2010年度（平成22年度）より共同利用・共同研究拠点としての活動を開始した。

これまで全国共同利用研究所となっていたものを含めて、国立大学附置研究所の多くが共同利用・共同研究拠点に認定され、研究者コミュニティの協力参加を得ながら、関連研究者に開かれた研究体制を築いていくことになったのにとまなうものである。

人文科学研究所も、従来の研究体制を基本的に維持しながら、研究の新たな方向を探るために、2009年に「人文科学諸領域の複合的共同研究国際拠点」の申請を行い、人文学の広い領域を対象とする唯一の拠点として認定を受けた。

研究所の伝統を活かしつつ、人文学および関連分野の研究者による共同研究を進めると同時に、施設や所蔵資料、データベースを広く内外の研究者の利用に供することにより、新たな研究領域、研究課題に取り組みつつある。人文学の基礎的研究を踏まえつつ、世界的視野から複数文化の生成、変動、相互交渉等を研究し、地球社会の調和ある共存に資する学術的知見を提供することを大きな目的として設定している。

拠点における共同研究としては、二つの種類を設けている。共同研究の課題および責任者（班長）を公募する「共同研究A」、共同研究班の研究員（班員）の全部または一部を公募する「共同研究B」の二種類である。拠点の運営、公募研究プロジェクトや公募研究員の選定に関しては、所外・学外委員を加えた運営委員会、共同研究委員会で審議のうえ決められる。

2010年度（平成22年度）の「共同研究A」については、次のテーマに関連する研究プロジェクトを公募し、3件の課題を採択した。

- ・テーマ1「人文科学の基礎研究」
- ・テーマ2「複数文化の接触」
- ・テーマ3「現代社会と人文科学」

これらの共同研究は、原則として3年を期限とする研究を行い、論文集の刊行、国際シンポジウム、ワークショップの開催などの形で研究成果を公表することになっている。

データベース一覧

- 朝鮮研究データベース 水野直樹 編
- 文化人類学データベース 田中雅一 編
- 京都大学人文科学研究所 所蔵甲骨文字
- 〈近代日本の南方関与〉に関する戦後日本刊行文献目録（稿）
- 東アジア人文情報学研究センターのデータベース
 - 東方学デジタル図書館
 - アジア学術調査資料ギャラリー（バーミヤーン石窟寺院）
 - 中国文物資料ギャラリー（画像石データベース、中国歴史地図）
 - 文字資料データベース
 - 漢籍関連テキストデータベース
 - （西域行記データベース、四庫全書総目提要テキストデータベース）
 - 全国漢籍データベース
 - 東洋学文献類目検索
 - 雑誌データベース
 - 唐代人物知識ベース

2010 年度共同研究班 (各グループごとの班名の 50 音順)

共同研究 A

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性	奥山直司
情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか——人文情報学の基礎を築く	山崎直樹
生命知創成に向けたプラットフォームの構築	小林傳司

共同研究 B

漢簡語彙辞典の出版	富谷 至
啓蒙とフランス革命・I ——1793 年の研究	富永茂樹
現代中国文化の深層構造	石川禎浩
術数学——中国の科学と占術	武田時昌
第一次世界大戦の総合的研究	山室信一、岡田暁生
トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究——物語からモニュメントまで	田中雅一
日本・アジアにおける差異の表象	竹沢泰子
東アジア古典文献コーパスの研究	安岡孝一

共同研究

移民の近代史——東アジアにおける人の移動	水野直樹
王権と儀礼	藤井正人
近代古都研究	高木博志
近代日本と異文化接触 ——「同時代化」を生きた人々の記録	VITA, Silvio
古典のなかのアジア史	籠谷直人
色道書の言語をめぐる文明史的研究	横山俊夫
上海博物館蔵戦国竹書を読む——中国古代の基礎史料	浅原達郎
真諦三蔵とその時代	船山 徹
西陲發現中國中世寫本研究	高田時雄
中国古鏡の研究	岡村秀典
長江流域社会の歴史景観	森 時彦
唐代道教の研究	麥谷邦夫
東アジア初期仏教寺院の研究	岡村秀典
東アジア地域間交渉と情報	岩井茂樹
北朝石刻資料の研究 II	井波陵一
南アジア北辺地域における文化交流の諸相	稲葉 稜

共同研究班の班員数とその内訳 (2010 年度)

共同研究班	所内者	学内者	学外者	大学院生 (学外)	大学院生 (学内)
A 班 (3 班)	14	4	22	2	0
B 班 (8 班)	62	14	169	16	24
その他 (16 班)	80	28	214	16	19

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性

班長 奥山直司

グローバル化は人、資本、情報、資源などの地球規模での大量流通を特徴としているが、情報の一種である思想・宗教の流通と消費については未だ十分に議論されているとは言いがたい。現代社会において、思想や宗教の流通と消費にはどのような特徴があるのか。本研究班では、この問題を、複数文化の重層的接触という観点でとらえ、現代のみならず、過去150年程度のスパンの中でこれを分析、考察している。そのための柱として、宗教と進化論(ダーウィニズム)の二つをテーマに据え、それらの伝播の諸相を人文学の諸分野にわたって検討している。

宗教の伝播が人文学の大きな研究テーマであることは、ここに改めて述べるまでもない。仏教、キリスト教、イスラム等の各地への伝播過程や変容過程を複数文化の接触としてとらえ、論じてゆく。

また進化論は、近代の代表的な科学理論であるが、それはまた社会進化論等の形で思想・哲学としても大きな影響を与えてきた。アジア地域での進化論の受容、または影響については、特に日本の場合が各分野で個々に論じられているが、その全貌は未だ明らかではない。この研究班では進化論を近代思想の一つと見なし、宗教学等の諸学の形成と展開、政治思想、芸術運動、宗教、社会・文化現象等にどのような影響を与えてきたかを包括的に吟味し、さらにその検証の範囲を中国など他のアジア諸国まで広げ、「文化現象」としての進化論を幅広く追究することを目指している。

この研究を通じて、思想・宗教のグローバルな展開について、複数文化の接触という視点から一定の見取り図を描くことが可能となるだろう。また研究班と、それに伴う情報の蓄積と公開が、関係諸分野の相互交流を刺激し、活発化させることも期待される。グローバル時代にふさわしい人類像、人間像の提示を複数宗教の接触過程や進化論と伝統的思考との接触過程を通じて提示することで、現代の人文学の可能性を明らかにしたい。また人文科学研究所、とりわけ人文学国際研究センターの基幹プロジェクトであった「複数文化接触領域(コンタクト・ゾーン)の人文学」研究班の問題意識を継承しつつ、その他の諸活動と連携して、積極的に成果を海外に発信すると共に、さらに公開講演などを通じての社会還元を企画している。

情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか

——人文情報学の基礎を築く

班長 山崎直樹

本研究課題の副題になっている「人文情報学」とは、文献を機械処理することにより、①人手を用いたのでは処理不可能な大量のデータを扱い、②人手による処理では帰納できない類の情報を抽出し、③得られた情報を機械可読かつ再加工可能な形式で蓄積する学問分野を指すと、一般に理解されている。もちろんその理解は誤りではないが、われわれの研究は、さらにその先——最終的には、「××という特徴をもつ文献はどのような構造をしているのか」を機械可読な形式でモデルとして提出する、つまり「文献の構造の情報学的モデル」を確立する——をゴールとして目指している。

このゴールに少しでも近づくため、今後、現在用いることが可能なさまざまな情報処理技術——テキストにメタ情報を付与するxmlなど各種のマークアップ、日本語の解析で顕著な成果を挙げている形態素解析・構文解析技術の応用、n-gramモデルなどによるデータマイニング、テキスト間の近縁性を調べる系統学的分類法、テキスト内のネットワーク構造あるいはテキスト間のネットワーク構造の抽出と可視化——を用いて、あらゆる角度から文献の解析を試みる予定である。

頭注・割注が施され、句読点・送り点・送り仮名が施された漢文(『漢文大系』富山房)。これは原文には無いメタ情報を付与されたマークアップテキストであるといえる。ここからどのような機械可読な情報を引き出せるかが、本研究の課題の一つである



生命知創成に向けた プラットフォームの構築

班長 小林傳司

生物学研究は、1970年代を起点として、実験室に閉じたかたちで営まれていた自然哲学的色彩を伴う研究から、医学領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具体的な影響を持つ生命科学へと変容を遂げた。またこの生命科学は、知識や技術を拡大し続け、近年のiPS細胞や合成生物学といった新しい先端的研究分野に見られるように、国際社会が関心を示すような複雑な課題をも生み出し始めている。このような科学の構造転換の状況において、生命科学を社会の中にあらためて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として把握しなおすことが必要である。

現在まで、日本の生命科学の課題に関する議論は、直接関わりのある生物学や医学といった一部の学問分野の中、関連した制度や行政などの縦割り事業の中で、それぞれに、ほぼ閉じた形で行われてきた。しかしこのような議論では、社会全体を視野に入れた途端、その狭さや影響力の不足に、歯がゆい思いをすることになる。

本班では、生命科学上の議論に公共性を与え、その課題を社会全体で考えるために、生命科学に変わる呼び名として「生命知」という新しい用語を作った。生命知という学問の特徴のひとつは、従来の生命科学と異なり、生物学や医学だけでなく歴史、哲学、社会学など様々な専門分野の人たちの参入を始めから設定し、積極的に配慮する点である。生命知の自由な理念の中で、それぞれの分野の目的や本質、問題を、互いに分かる言葉で話し合い、共有し、より豊かな知の中に包摂する。このような活動は、日本ではまだ本格的な組織や機関がないが、例えばアメリカでは、アメリカ科学振興協会 (American Association for the Advancement of Science, AAAS) が、イギリスでは、生物工学・生物化学研究評議会 (Biotechnology and Biological Sciences Research Council) が、科学の自由という理念と専門家の協力のもとに、課題の共有と討議の場となっている。

本研究は、2010年から3年間で、生命知を現実に稼働させるプラットフォームを構築することを目的としている。また年に1回開催予定のシンポジウムでは、専門家だけでなく、一般の方々や海外の活動にも、研究内容を発信し、共有することをめざす。

おくやま なおし
奥山直司

高野山大学教授

専攻分野 ●仏教学

研究テーマ ●日本近代仏教の形成と展開、インド・チベット仏教の図像学的研究

やまき なおし
山崎直樹

関西大学外国語学部教授

専攻分野 ●中国語学・言語学

研究テーマ ●言語横断的な統語構造の研究、言語構造の情報化

こばやし だし
小林傳司

大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授

専攻分野 ●科学技術社会論・科学哲学

研究テーマ ●科学技術の社会的統制

漢簡語彙辞典の出版

班長 富谷 至

本研究班の目的、および達成すべき成果は、『漢簡語彙辞典』を編纂し、出版することである。出版社はすでに決定しており、2013年度内には刊行する。

中国古代、とりわけ秦漢時代の遺跡や墓葬からは、近年木簡の出土が相次いでいるが、ここでいう「漢簡」、すなわち本辞典の語彙採録対象となるのは、漢代の西北辺境地帯から出土した、いわゆる辺境出土簡である。現在の中国・甘粛省一帯は武帝の時に漢帝国の領域に組み込まれ、そこには遊牧民の侵攻に備えて万里の長城が築かれるとともに、軍事施設や官署が配置された。これら施設で保管され、廃棄された木簡は、極度に乾燥した気候のために腐敗することがなく、20世紀以降の調査・発掘によって多くの木簡が発見されている。それらのうち、エチナ川流域で発見されたものは、そこに漢代の居延県が置かれたことに因んで居延漢簡と、一方敦煌周辺で見つかったものは敦煌漢簡と呼ばれている。

本辞典は、居延漢簡、敦煌漢簡の語彙を網羅し、その意味と、文献史料および簡牘資料中の用例を挙げている。辺境出土簡には当時の行政文書が数多く含まれ、その中には従来の典籍史料には見えない、公文書に独特の術語や言い回しが現れる。また手紙やその下書きも少なからず存在し、定式化した書面語や、口語表現と思しい特殊な語句が見られる。こうした語彙を集積し、意味を示し、漢簡の正確な読解に資することが本辞典の目指す一つの目標である。これに加えて、本辞典は特別な術語のみならず、日常的に使用される語も検討・採録の対象としており、それらの漢簡中での用法と、典籍史料中での用法とを比較することにより、漢簡に特有の用語法を明示してゆくことも目指されている。

なお、本研究班の共同研究員はすべて公募であり、居延・敦煌簡牘について専門的な知識を有する研究者が毎週の研究班に出席し、議論を重ねている。



敦煌、大方盤遺跡。川沿いに設置された穀倉の跡とされている

啓蒙とフランス革命・I

—1793年の研究

班長 富永茂樹

ヨーロッパで18世紀をとおして成長してきたいわゆる「啓蒙哲学」は、世紀の終りになってひとつの重要な転機を迎える。すなわちフランス革命である。「啓蒙とフランス革命」と題する本研究は、しかし、啓蒙哲学が革命を生み出したとする単純な考え方に立ってはいない。また逆にフランス革命がこの哲学思想を継承するものであるという、当時から存在した観点も採用しない。



ドゥマシー画「シャン・ド・マルスにおける最高存在の祭典（共和暦2年プレリアル20日）」、パリ・カルナヴァレ博物館蔵

ここで問題となるのは、啓蒙思想が革命の思想そのものへと転化すると同時に、革命の進展が啓蒙を変形させてゆく、そうした観念と政治との二重の転変のプロセスなのである。そこには、革命に接近してみずからを実現してゆく啓蒙、革命に接近しながらも到達できずに終わった啓蒙、革命を乗り越えていった啓蒙も見ることができる。

本研究では、したがって革命初期やテルミドール後の時期に革命をいわば「正当化」するために多数登場した、啓蒙にかかわる言説と表象の分析を行うものではない。むしろ思想そのものに内在する政治の論理を明らかにすることがめざされるだろう。そうした作業をはじめると、まずはフランス革命の絶頂ともいべきモンターニュ派独裁期のいくつかのテキスト（ロベスピエール、サン＝ジユスト、ピヨー＝ヴァレヌなど）の読解を行い、そこから遡って啓蒙の世紀末における様態と力学を探るといった手順がとられる。

なお、タイトルからはフランス革命に限定されるように見えるが、それはフランス語以外の言語圏を排除するものではなく、ドイツ、イギリス、合衆国などにおいても、革命にかかわる重要な哲学的課題が見つかることはいうまでもない。その意味で本研究は全ヨーロッパ、さらにはアメリカへと視野は広がるのが予想される。

現代中国文化の深層構造

班長 石川禎浩

現代中国文化は百花繚乱の状態にある。かたや伝統的学術すなわち「国学」の再評価が進む中、世紀転換期を挟んで伝播したポストモダンの諸思潮も中国の知識界に大きな影響を与えている。民主化の声がインターネットを通じて伝播する一方、インターネット利用をめぐるは様々な公的規制が加えられ、それがさらに内外の議論を呼ぶなど、現代中国の文化は、同国の経済面の繁栄と相まって、世界の注目を浴びている。

だが、百花繚乱の如く見える現代文化は、芸術にしても思想にしても、その中に歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を内包している。歴史の刻印や記憶のいくつかは、例えば文化大革命や民主化運動弾圧のように、公的に巧みに封印されてはいるが、間違いなく文化の深層を形作っている。現代の中国文化が、歴史的にどう位置づけられるのかという問題に答えるには、海外思潮の流入ひとつをとってみても、その歴史的経験（清末や五四時期）との比較を踏まえなければならないであろう。本研究班は、こうした現代中国の文化の深層構造を、20世紀初頭から今日に到るおよそ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとするものである。政治との関わりで言えば、現代中国文化は旧来のイデオロギーと如何なる摩擦を抱えているのか、共産党型の政党文化は社会にどのように広まっていったのか、などの課題の解明が目指されるであろう。また、文化活動そのもので言えば、今日の文化の多様化は、清末から民国時期の文化的カオスと類似の状況なのか、そしてそもそも中国という文明体系が近代以降の異文明との接触の中で、それへの接合をはかるということとはどのような文明史的意味を持つのか、これらがすべて俎上

に載せられるであろう。なお、本研究班は現代中国研究センター（現代中国地域研究推進事業 京都大学拠点）の研究グループ1の事業の一環をなしている。

毛沢東と蒋介石が1945年に会談した時の記念写真をあしらったTシャツ



術数学

——中国の科学と占術

班長 武田時昌

先秦における自然探究の試みは、「方術」と呼ばれるもののなかに含まれていた。漢代の思想革命において、方術のなかではぐくまれた科学知識は経学を中心とする学問体系に包摂されるようになり、専門的な官吏による研究体制が確立した。また、『周髀算経』『九章算術』『黄帝内経』といった後世に大きな影響を与えた理論書も編纂され、方術から自然科学が離陸する。その流れは、ちょうど「魔術から科学へ」という近代科学成立の神話に似ている。しかし、欧米の科学研究が錬金術、占星術や自然神学と隔絶した関係になるのはずっと後のことであり、非科学的要素を捨象してしまうと、当時の科学思考の実相と本質は見失われてしまうだろう。

同様のことは、当然のことながら中国科学の史的展開にも当てはまる。漢代において自然科学が自立することで、方術が廃れるわけではない。三国時代以降にも多種多様な占術書が著された。しかも、自然科学の諸分野は、易を中核とする様々な占術と複合的に絡み合った領域、すなわち術数学という中国特有の学問分野を形成した。

これまでの科学史研究においては、天文占、風角、六壬、太乙、遁甲、九宮といった種々の占術は象数易とともに疑似科学として考察対象の枠外に置かれており、術数学の学問的輪郭すら明らかではない。しかしながら、西欧近代科学に対峙する中国伝統科学を構造的に把握しようとするならば、術数学というコンセプトにおいて科学と占術を包括的に考究すべきである。そこで、術数学を総合的に考察する研究プロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとしては、近年に出土した先秦から漢初に至る簡帛資料、とりわけ日書が目される。その占術理論と中世以降の術数書との関連性を探れば、方術から術数学へとどのように発展していったのかを明確にすることができるはずである。また、本邦に残存した『五行大義』や陰陽道書も有益な情報源である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探ることにした。班員には、古今の占術や陰陽道の研究者に加え、天文暦法、中国医術、本草学から中国哲学、道教、音韻学に至る多彩な分野の専門家が参加しており、科学と占術の境界領域において複眼的な考察を繰り返しているところである。

第一次世界大戦の総合的研究

班長 山室信一、岡田暁生

1914年から始まった第一次世界大戦は「現代世界」の幕開けを荒々しく告げる出来事であった。戦争のグローバル化およびボーダレス化、技術開発競争、科学界・産業界までも巻き込んだ総力戦、理性への不信、教養文化の崩落と科学技術崇拜、国際協調システムの模索など、現在でもわれわれは第一次世界大戦がもたらした衝撃の只中にいるといっても過言ではない。第一次世界大戦とともに始まったこの時代は、たとえばホブズボームのいう「短い20世紀」のように、ソ連・東欧の社会主義崩壊とともに終結したわけではなく、むしろ「長い20世紀」として現在にまで及んでいる。しかもロシア革命およびマルクス主義が世界的規模において有した絶大なインパクト自体が、第一次世界大戦による「西洋の没落」(シュペンゲラー)とその克服の模索を背景としていたと捉えれば、社会主義の崩壊によって、我々はまさに第一次世界大戦がもたらした境位に再び改めて直面しているとさえ言えるだろう。

このような第一次世界大戦のインパクトの内質を、文化の垂直軸(文化ジャンル横断的)および水平軸(通文化的)の両面で検討し、同時に大戦後世界(第二次世界大戦を含む)を視野に入れつつ模索することが、本研究班の目的である。本研究班では、芸術、政治、経済、社会、思想のさまざまな分野において、第一次世界大戦がどのような位置を占めていたかについて発表者に問題提起をしてもらい、その共通点と相違点を探っている。全学共通科目の提供や、レクチャーコンサートの開催などを通した社会への発信も積極的に行ってきた。2010年度からブックレット出版の形式による成果の公開も始まっている。開戦百周年となる2014年を控え、活発化しつつある海外の研究プロジェクトとの提携も進められている。



塹壕からの突撃を試みる西部戦線の兵士たち

トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究

——物語からモニュメントまで

班長 田中雅一

社会人類学(現・人類誌)部門は、過去20年にわたって主体化をめぐる研究班を何度か組織してきた。それらは、①暴力(1990～94)、②主体・自己・情動構築(1994～98)、③フェティシズム(2000～06)に関わる研究班で、トラウマ経験をめぐる本研究(2010～15)もこの系譜につながる。それではなぜトラウマ(心的外傷)なのか。トラウマの原因は、幼児のころの虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、暴力行為、とくに戦争での経験、犯罪や事故、自然災害などである。本研究では、トラウマをより広い意味で苦悩(suffering)や痛み(pain)とみなす。この苦悩に対し人びとがどのような形で対峙し、克服しようとしてきたかについて考えてみたい。この過程をここでは組織化と表現する。トラウマは一般に心理学や精神医学が対象とする問題領域であるが、組織化という過程はこれらの領域にとどまるものではない。



有刺鉄線をテーマに写真を撮っている。トラウマとは、私たちの心に生じる立入禁止区のようなものだ。有刺鉄線にまきついていては、トラウマを馴化しようとするエロスの情動を表していないだろうか。コロンポにて

哲学者のElaine Scarryは、本研究発足に際し、重要な指針となった*The Body in Pain: Making and Unmaking of the World*という書物で拷問や戦争の記録を丹念に読み解き、痛みが「世界」の崩壊につながる体験であることを明らかにする。そうした痛み・苦痛あるいはトラウマを克服していくにはどうすればいいのか。Scarryは、芸術、司法(和解)、医学の三つの領域に世界を再構築する可能性を求める。本研究では、このScarryのテーゼを多角的に検討し、人類社会の新たなヴィジョンを提示したい。

トラウマやPTSDなどの医療用語が、日常的に使われるようになって久しい。心理学や精神医学用語が普及していった理由は、わたしたちの世界が「脱神学化」してきたことを意味している。そのような状況でトラウマについてあえて考察することは、現代日本社会の分析にも貢献することになるだろう。

日本・アジアにおける 差異の表象

班長 竹沢泰子

本研究会は、人種の表象と社会的リアリティについて、とくに日本・アジアに焦点を当てて考察するものである。人文科学のみならず自然科学をも射程に含め、分野横断的な研究体制をとる。班員は、歴史学、社会学、文化人類学、美術史、科学史、生命科学などのさまざまな領域の専門家によって構成されている。

人種は、生物学的実体をもたないことが近年の遺伝学研究などで明らかにされているが、医療、社会制度、美意識にいたるまで、強固に社会的リアリティをもっている。何がどのようにこのようなリアリティを生み出し、維持させているのだろうか。その鍵を表象に求め、そのしくみに光を投じることが本研究の狙いである。

欧米の人種表象の研究では、視覚的な表象に関しては膨大な研究の蓄積が存在するが、日本やアジアに存在する「見えない人種」の非視覚的な表象にかんしては、研究例が多いとは言えない。「汚い」「臭い」「怖い」といった生活感覚で語られる差異。非可視的でありながら、強固に語り継がれる「穢れ」「血が違う」などの言説。日本や東アジアなどの地域に顕著に見られる、こうした「見えない人種」の社会的リアリティを創り出す表象のしくみを炙り出すことに重点をおきたい。

本研究会は、これまでの共同研究で発表してきた理論的枠組みを土台としている。これまでの成果として、*Racial Representations in Asia* (Kyoto University Press, 2011)、『人種

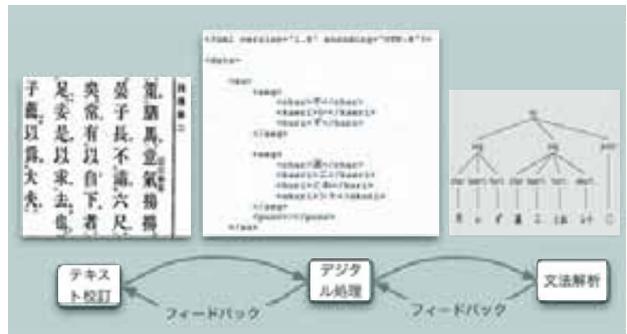
の表象と社会的リアリティ』(岩波書店 2009年)、『人種概念の普遍性を問う』(人文書院 2006年)、『人文学報』100号「特集 差異の表象」(印刷中)、京都大学オープンコースウェア「人種の表象とリアリティ」「人種概念の総合的理解」などがある。

分野横断的・地域横断的な共同研究

東アジア古典文献 コーパスの研究

班長 安岡孝一

わが国の文化的活動は、奈良時代より随時もたらされた大量の中国の漢文と、それを訓読という手法によって解釈した歴史なしには語るができない。特に、近世、明治～昭和初期における漢文訓読という営為は、伝統的な日本の思想基盤を見直す作業であったとともに、近代国家としての思想基盤を再構築する過程において、重要な位置を占めるものであった。



コンピュータによる漢文解析

本共同研究の構想は、その前身となった共同研究班「漢字情報学の構築」(2004年4月～2008年3月、班長:安岡孝一)で培われた知識、特に、コンピュータを用いた漢文解析に関する研究の中から生まれた。その中で、われわれは、日本における訓読が、元となる漢文とその読み下し文との間でそれぞれ異なる文法構造を橋渡しするための手法であることから、漢文の文法解析において有効に働きうるはずだ、という感触を得た。すなわち、訓読という手法を情報学的な視点から再検討し、訓読漢文コーパスともいべきものを作成して、それを他の一般的な漢文(白文)に適用することで、漢文の意味構造を解析可能になるだろう、という予想である。

本共同研究では、明治～昭和初期に日本国内で作成された訓読漢文テキストをコーパス化し、それを基に、漢文の意味構造を解析するシステムの研究・開発をおこなっている。すなわち、これまで漢文を読むための技法に過ぎなかった訓読を、コンピュータによる文法解析メソッドの一つとして、情報学的視点から捉えなおしている。この結果、文法的な構造化がおこなわれずに単なる文字列のままに放置されている大量の漢文に対して、その意味構造を解析することが可能となり、漢文の内容理解への大きな足がかりになると考えられる。

移民の近代史

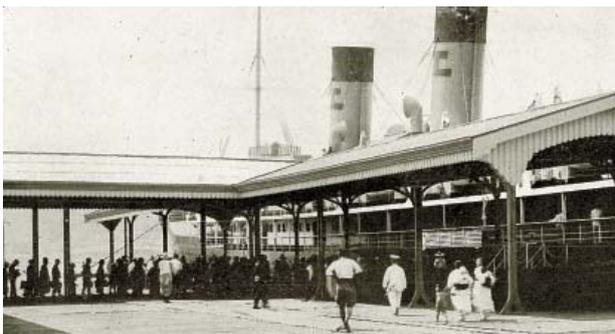
——東アジアにおける人の移動

班長 水野直樹

19世紀後半から20世紀前半の時期、東アジアにおいて大規模な「人の移動」という現象が生じた。東アジア地域の世界資本主義システムへの包摂、日本帝国の膨張、それらにともなう各地域の社会的変動などがその要因である。

この問題についてこれまで研究がなされてこなかったわけではない。しかし、従来の研究の多くが各国・地域別になされてきたため、東アジア全体を対象にして総合的に考察されることは少なかった。本研究は、日本、朝鮮、中国（主に「満洲」地方）など各地域間の人の移動とその背景を検討することによって、人の移動の歴史の意味を考察することを目的としている。

各地域で生じた人の移動は、それぞれ背景を異にしているか見えながら、相互に関連し合っている場合がある。「満洲国」成立後の日本の移民政策を例にとると、日本人の満洲移民、朝鮮人の日本「内地」移住および満洲移住の間には、明確な相互関係が見られる。日本政府が朝鮮人の「内地」移住を抑制する政策をとったのに対して、朝鮮総督府はそのためには朝鮮人の満洲移住が必要であると主張した。他方、満洲国を実質的に支配する関東軍は、日本人移民を優先する立場から朝鮮人の移住に対して消極的であった。このような移民政策の面での相互関係を確認した上で、移住先において日本人・朝鮮人・中国人がどのような関係にあったのか、も検討すべき課題である。さらに、第二次世界大戦の終結、日本の敗戦、それに続く各国・地域における政治情勢の変動は、移住先から故郷への帰還（引き揚げ）だけでなく新たな人の移動を生み出した。このような問題も視野に入れながら、歴史学・地理学・人類学・社会学など研究者の共同研究として、「移民の近代史」を考察している。



朝鮮・釜山港の関釜連絡船乗り場（『日本地理体系12 朝鮮』改造社 1930年）

王権と儀礼

班長 藤井正人



会読資料のもとになっている新発見写本 撮影・井狩彌介

古代インドにおける王権と儀礼の関係を、ヴェーダ祭式文献を基礎資料にしてインド学、言語学、歴史学、考古学、人類学、美術史など複数の視点から分析するとともに、さまざまな地域や時代における王権と王権儀礼に関わる諸問題について比較研究をおこなっている。王権と儀礼との関係は、その社会における政治的および宗教的権力である王権と司祭権の関係（特に一体化しているのか分離しているのか）にもかかわっているので、それについて具体的な資料に基づいて研究することもめざしている。

隔週の研究会では、会読と報告という二つの形式の会合を交互に開き、資料の蓄積と研究視野の拡充をはかっている。会読では、ヴェーダ時代の王権儀礼のひとつであるラージャスーヤに関するすべてのサンスクリット語テキストを読解することによって、この儀礼に関係する一次資料の集成と研究をすすめている。ラージャスーヤは、灌頂式と王座につく儀式とを中心に、戦車走行や賭博などのさまざまな祭事を含む大がかりな王即位式である。本来の比較的小さな即位儀礼が、体系化されたヴェーダ祭式のなかに編入され、大規模な王権儀礼として整備されたものである。近年学界にもたらされたヴァードゥーラ派ヤジュール・ヴェーダの新資料の当該部分の校訂と英訳を含む、この儀礼に関する英文の資料集の出版を準備している。報告では、班員およびゲストスピーカーが、王権と儀礼に関係する種々のテーマで報告をおこなっている。また、会読で作成したラージャスーヤの資料をさまざまな角度から分析し検討することによって、古代インドの王権と王権儀礼の特徴を学際的な視点から明らかにすることもめざしている。最終成果として王権と儀礼をめぐる論文集にまとめる予定である。

近代古都研究

班長 高木博志



2007年10月14日、軍都・金沢の東の廓にて。定期的な「近代古都研究」の共同研究会の他に、奈良公園や大阪城、旧城下町・岡山・仙台、軍港都市・呉などの実地調査を行う

今日、京都市への観光客は年間4600万人をこえ、空前の「古都」ブームである。また世界遺産登録を競い合う、国内外の歴史都市の顕彰も盛んである。そうしたなかで「古都」を相対化した学問研究も必要であろう。本来、「古都」とは、天皇がいなくなった「旧都」（もとのみやこ）の意である。1869年の東京「奠都」による天皇の畿内よりの離脱は、古代から近世をつらぬく王権の基盤を編成替える日本史上の事件であり、奈良・京都という古都形成の起点となった。

さて共同研究「近代京都研究」班（2003～2005年度、丸山宏班長）を進展させ、歴史学・建築学・造園学・美術史等の諸分野の研究者による総合的な「近代古都研究」を行いたい。「古都」は近代に生みだされた概念であり、それは古都保存法（1966年）以降の戦後社会に定着した。2003年には古都保存法で大津が指定され、地方旧城下町も「古都」の対象になりつつある。また冠せられた「古都」イメージと都市行政のめざすものは、必ずしも一致したわけでない。たとえばつねに工業・産業振興を行政の基盤におく京都府や市の姿勢をみると、その理念と実態には歴史的にズレがあった。

「歴史と都市」を一つの手がかりとして、京都・奈良・首里等の王権と関わった都市のみならず、金沢・仙台・岡山・大阪等の旧城下町といった「古都」を研究対象にしたい。各地の「古都」は、ナショナリズムの高揚と平行に、古代や平安時代や藩祖の開市時など、その特色となる時代や来歴を顕彰し「お国自慢」を定式化させた。前近代の「歴史」や「伝統」と、その近現代における捉え返しや葛藤を、政治・社会・文化・経済にわたる現実の中から多角的にみてゆきたい。学際的に近世から現代まで、自由な議論を重ねる中で、日本における「古都」論を考えたい。

近代日本と異文化接触

——「同時代化」を生きた人々の記録

班長 VITA, Silvio

19世紀以降、旅行、在日勤務、長期出張などの目的で日本を訪れた外国人が、多くの記録資料を書き残したことが知られている。それらは当時、様々な形で読まれたものであるし、日本においては現在も読まれ続けている。ただし、それらの資料の総体を整理分類し、多面的なアプローチによって分析するという作業は十分に行われているとは言い難い。この点に貢献することが、本研究班の主旨である。年代的に言えば19世紀の半ばから20世紀半ばまでの約百年間、いわゆる「長い19世紀」を対象とし、その期間を通じて、世界の中で近代日本がいかんして形成されていったのかを検討してみたい。

日本について書かれた諸資料を読むにあたっては、様々な側面を考慮する必要がある。近代日本と外の世界との関わりはもちろんのこと、日本という存在がそれぞれの国の知識人や大衆の文化の中でどのような位置を占めたのか、そしてまた日本を訪れて記録を残した人々が、そのような日本の位置づけにどういう形で関わっていたかという点などである。本研究班では、それらを念頭に置きつつも、上述の諸資料を「近代日本の記録」として読むことを基本とする。ただ同時に、近年、文化史研究において意識されている、「見る」行為、「見る」側の立場によるアプローチや内容の差異、という点にも注意しておきたい。

本研究班のもう一つの目的は、同種の資料を専門とする、あるいは関心を持つ、国内外の研究者を招くことにより、研究ネットワークおよび研究者ネットワークを構築することである。研究班を通じて整理分析された資料を、研究資源としてそのようなネットワークの中に置き、活用していくことで、「外から見た近代日本の記録」研究の成果を、再度「外」へ向けてフィードバックすることが可能となるだろう。



万国博覧会を初めて見る日本人。文久使節団が1862年の第2回ロンドン万博を視察する（The Illustrated London Newsより）

古典のなかのアジア史

班長 籠谷直人

近代資本主義世界の形成は、主権国家システムが提供した制度や機関によって、市場に安全が持ち込まれることを前提とした。ヨーロッパに即して概観すれば、市場を完全に近づけようとする、裁判所、取引所、そしてイデオロギーなどが、権力と商人にとって犯しがたい「公共財」となり、裁定の外部化がすすむことで、市場インフラを形成した。「計算可能性と信頼性を持つべきだとする要求は、合理的資本主義の死活的要求」であった。

他方で、帝国であった近世アジアにおいては、計算可能性を高めるような、市場秩序を提供する公共財は、公権力と商人との間では創造されなかった。計算可能性を高める政治的径路は、皇帝の権威の中心性を脅かすことになるから、決して選り取られることはなかった。しかしながら、アジアの帝国は、政治的中心であるからこそ、主権国家間競争が展開した「重商主義」とも無縁であったことに留意したい。アジアの帝国は、封建制や近代的な官僚制のような「硬い枠組み」ではなく、中心としての王権の威信を顕示することで、広域統治を有効に果たした。アジアの帝国は、「政治は経済生活に対して事実上著しく控え目な態度」をとり、「理論的にも「自由放任」の原則」を貫いたとM・ウェーバーも指摘している。そして、そうした開放性を背景に、アジアの商人は権力の後援をうけなくても、地縁、血縁、業縁を通して取引コストを切り下げる工夫をこころみだ。主権国家や私的所有権がなくとも、農業の商業化やプロト工業化による要素市場と生産品市場は展開したのではないだろうか。この共同研究班では、古典的な歴史学をとおしてアジアの歴史的径路を議論している。



アジアの「長期の19世紀」を議論した共同研究の成果『帝国とアジア・ネットワーク』

色道書の言語をめぐる 文明史的研究

班長 横山俊夫

安定社会が閉塞せず文明へと赴くのは至難である。文明とは、社会を構成する人、もの、ことがアヤを織りなし、環境もふくめた全体がハンナリと光り続けること。文明化の成否は、多様な構成要素をどのような仲立ちがとりもつかにかかっている。武断の影がうすれる世で幅をきかせる仲立ちは、わけても言語である。

この研究班は、17、18世紀の安定期日本の京大坂に栄えた遊廓での遊びの指南書をとりあげる。その、武にたよらぬ特異な閉鎖空間は、いわば安定社会の文明化の小規模な実験の場であった。そして、そこでの言葉の作法こそ、廓の賑わい持続の要めであった。そのやりとりの実態を、残された指南書から浮かび上がらせ、言語と文明化の関わりを考えようとしている。

班員の多くは、この組織の前身の「文明と言語」班で、藤本箕山著『色道大鏡』に導かれて廓の式目を学び、野暮な「瓦智品」から、「神」となる「大極品」にいたる二十八品の男の姿をながめつつ、交わりの雅俗について考えた。さらに、西水庵無底居士の手になる『難波鉦』^{なにわどら}に挑み、その話し言葉の虚実、柔剛、明暗に呆れつつ、20章あまりを校訂、現代上方語にも試訳した。



『古銀買』(1680 京大・穎原文庫)が描く『難波鉦』評定。当研究班には女性あり

今の班では、同時代の関連資料にも視野を拡げつつ、『難波鉦』がはらむ文明史的なメッセージを抜き出そうとしている。班員の専門分野は、言語学や古典文芸学にかぎらず、分子生命科学や霊長類学から情報処理学にもわたる。資料輪読と並行に、各自の分野での現代学術用語の動態批評も開陳し合っている。それが300年前の色道書の読解に役立つとともに、現代社会の文明化についての思索、対話をも促すからである。

上海博物館蔵戦国竹書を読む

—中国古代の基礎史料

班長 浅原達郎

2004年4月に「中国古代の基礎史料」班として発足し、7年目を迎えた2010年からは、「上海博物館蔵戦国竹書を読む」というテーマを掲げている。『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、2001年11月刊行の第一冊より、これまでに七冊が出版され、第八冊の出版も間近いと聞く。われわれがこれを読み始めたのは、2006年のことで、この研究班としては、もっとも力を入れてきた学習課題である。これまでそれをあえて看板に掲げなかったのは、読み始めた時点で、『上海博物館蔵戦国楚竹書』もすでに第五冊が出ており、われわれは研究の最前線からすっかり遅れをとっていた。いろいろな事情から、われわれが『上海博物館蔵戦国楚竹書』を手元に見ることができるようになったのが、2005年のことであり、周回遅れのスタートもやむをえないことなのだが、世に誇るべきことでもないの、あまり目立たない



研究班の成果を公表する「古竹書」

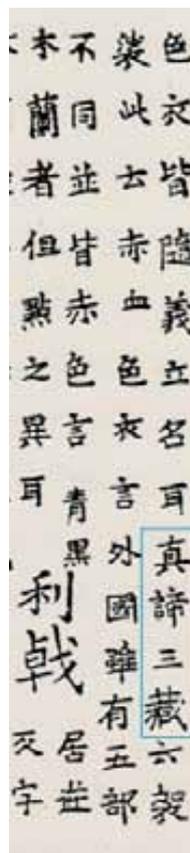
ようにしていたのである。それから4年がたち、2010年の時点で第六冊を読んでいる。先頭に追いつくめどは立たないが、さすがにここまで来ればそう捨てたものではあるまいと、おそろおそろむしろ旗を立ててみることにした。あえて先を急ぐことはないというのが、この4年間でわれわれのえた教訓である。2007年の初頭に『上海博物館蔵戦国楚竹書』第二冊中の長篇「容成氏」を読んでいたとき、竹簡の配列についてわれわれ独自の修正案を持つことができたことは、小さな自信となった。諸先達の後を追いつつも新しい発見は可能である。いささかずるいが、ゆっくり後を追っているからこそ、新しい視界が開ける、ということもある。上海博物館蔵の竹簡の配列を考えると、その外見が手がかりになることに気づいたことは、そのひとつであり、最近読んだ「孔子見季桓子」でも、そのおかげで新しい配列案にたどりついた。少なくとも、いま置かれた環境のなかでは、進むべき道をたどっていると思うのである。

真諦三蔵とその時代

班長 船山徹

共同研究班「真諦三蔵とその時代」を始めて5年がすぎ、さらに1年の延長を認められて今に至る。真諦は6世紀の中頃に中国の南方各地を転々と移動したインド人僧侶であり、著名な仏典漢訳者の1人である。この人物を軸に、インド文化と中国文化の思想的歴史的交渉を具体的に知るところをめざしている。

研究班で読んでいるのは、通常知られているような真諦訳(翻訳文献)ではなく、真諦自身の教説を弟子が書き残したものである。その特徴のひとつに、中国文化圏の聞き手を初めから想定しつつインド人の立場から発言する点がある。つまり中印文化の混濁的性格である。ただ、それがきれいな形で現存していれば、ことは単純明快だったのだろうが、現実には複雑を極める。弟子の書き残したものの自体が散佚し、現存しない。そのため我々は後代の諸文献に引用される真諦の発言の断片をかき集め、佚文集成を作成しながら読んでいる。そうした場合、錯綜した状況が生じるであろうことは容易に察しがつく。引用は原文のままと考えてよいかといったあたりから検討をはじめねばならない。



弟子たちが残した真諦の伝記には「先生は漢語に堪能であり、通訳なしで何ら支障はなかった」とある。しかし弟子が師匠の言語能力を賞讃することと、それを我々がどう受け止めるかは別問題だ。真諦の著述とはされるが、実際には筆記した弟子の考えも入っているであろうし、総じて真諦個人の説というよりも彼のグループの説とでも呼ぶべき性格がある。読解対象としてきた主なものは以下のとおり。『仁王般若経疏』『金剛般若経疏』『部執論疏』『金光明経疏』『撰大乘論義疏』『俱舍論義疏』『明了論疏』(以上、真諦による著作の佚文)、慧愷『撰大乘論疏序』『俱舍釈論序』、および『統高僧伝』に収める真諦伝 および関連する諸伝(道岳伝、曇遷伝)など。

唐の慧琳撰「一切経音義」に引用される真諦説の一部断片

西陲發現中國中世寫本研究

班長 高田時雄

20世紀初頭、ヨーロッパ諸国や日本の調査隊によって、甘肅、新疆の遺跡で数多の古写本が発見された。漢文写本がもっとも多いが、他にもチベット語、コータン語、ウイグル語、トハラ語など古代言語で書かれた写本もあり、古代西域の歴史、社会、文化、宗教を研究する貴重な資料である。なかでも敦煌や吐魯番から発見された文献は最も豊富で、世界各国に分散しているために、それぞれ敦煌学や吐魯番学といった国際的な研究分野が形作られてきた。

ところが21世紀に入った現在、これらの写本研究はまったく新しい段階に入った。その第一は、世界各地に所蔵されている写本へのアクセスが格段に改善され、大型図録の出版によってほとんどの写本が居ながら閲読できるようになり、ネット上でも精細なカラー画像が見られるようになった。第二は、データベースの発展によって、これら写本のテキスト検索が可能となり、そのコーパスは日々完全なものに近づきつつあることである。こういった研究環境の変化により、研究方法も変化せざるを得ず、国際連携に基づく、より総合的な研究が要請されることになる。本研究班はその動向に即応し、日本として然るべき貢献を果たすために組織された。

対象は既知の写本だけではない。近い過去においても、莫高窟北区や、吐魯番の墓葬から続々と写本が発見され、資料は今なお着実に増加しつつある。さらに倉庫に眠っていた過去の調査隊による発見品が新たに発掘されるような事例すらある。新しい環境のもとで新しい研究を展開する条件は今こそ熟しているというべきである。



敦煌莫高窟第16窟。右端に見える小さな入り口が、1900年に発見されたいわゆる藏經經洞(第17窟)。これは1907年にスタインが撮影した写真で、取り出された経巻が脇に積み上げられている

中国古鏡の研究

班長 岡村秀典

古代の銅鏡は、支配者だけでなく、庶民のあいだにも姿見の化粧具や一種の護符として用いられた。韻文としてあらわされたその銘文は、唐詩のように技巧をこらした作品ではなく、福祿寿を願う世俗的な吉祥句が多いものの、人びとの素朴な心情や世相がそのままに映しだされている。

言語学者の Karlgren が 257 例の鏡銘を解説した論文を発表して 75 年あまり経つ。中国をはじめ東アジア各地では新しい出土鏡の資料が陸続と報告され、日中の考古学において鏡の年代がさかんに研究されるようになったが、Karlgren の研究はほとんど顧みられていない。そこで本研究班は、新しく報告された鏡を加えて漢・三国・西晋 500 年の変化がわかるような銘文の集成と注釈の作成を目的に、2005 年度から 5 年間の期間をもって発足した。2008 年度には「前漢鏡銘集積」とその関連論文を『東方学報』84 に発表し、1年延長した 2010 年度には「後漢鏡銘集積」・「三国西晋鏡銘集積」とその関連論文を発表する予定である。

記録には残りにくい民間の言葉づかいや思潮など、鏡銘には伝世文献ではわからない情報が少なくない。また、発掘資料を用いることによって、その韻文が流行した時代と地域が特定できることも考古学の強みである。中国文学史で西晋詩と考えられていた韻文が、300 年前の前漢鏡に出現していたことがわかったのも、その成果のひとつである。Karlgren をのりこえ、つぎの 75 年のスタンダードをめざした研究も、いよいよゴールが近づいてきた。



前漢末期(紀元前1世紀末)につくられた銅鏡の拓本

長江流域社会の歴史景観

班長 森時彦

長江は青海高原に源を発し、6300キロにわたって兩岸を潤した後、大海に入る。その流域面積はおよそ180万平方キロ、日本のほぼ5倍に達する。そこに形成されてきた長江流域社会は、宋代以来、中華世界の心臓部ともいうべき役割を果たしてきた。とりわけ、下流域に位置する長江デルタ地帯は、稲作を中心とした豊かな経済を背景に、優れた学術、文化を育んできた。

本研究班（2008年4月～2012年3月の4年計画）は、長江流域社会がどのように形成され、どのように発展して近代世界と向きあうようになり、そして中国社会にどのような影響を及ぼしたのか、といったさまざまな問題を人文学的、とりわけ歴史学的なパースペクティブから多角的に解明することを目指してスタートした。

この研究計画はまた同時に、人文科学研究所附属現代中国研究センターが人間文化研究機構との共同事業として推進している「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」というテーマの総合研究（2007年4月～2012年3月の5年計画）の一翼を担うものでもある。現代の中国社会はどのようなプロセスを経て形成されてきたのか、というトータル課題を、その中枢部である長江流域社会を例にして検討してみようという試みである。

班員は京阪神各大学の研究者が多くを占めるが、とくに博士課程からポストドクターにかけての若手研究者が多数にのぼる点が際立っている。さらに最近では、中国などの外国人研究者の参加もとみに増加しつつある。



長江上流域、四川省自貢の井塩生産施設、産業革命以前における最大規模の産業施設

唐代道教の研究

班長 麥谷邦夫

中国には主要な宗教が五つ存在する。儒教、仏教、道教、回教、キリスト教である。このうち後二者が普及したのはかなり遅いものに対して、前三者は紀元2世紀後半からさまざまな形で互いに交渉をもちつつ、中国の社会や文化に大きな影響を与えてきた。この三者の相互交渉を称して三教交渉という。



顔真卿「麻姑仙壇記」(宋拓本)。漢代の女仙麻姑について記したもの

三教交渉の過程では、互いを非難しあう論争ばかりが主役であったわけではない。とりわけ道教は仏教教理の多大な影響を受けて自己形成を遂げてきたのであるが、仏教もまた儒教や道教の影響を受けて、インド仏教とは似て非なる中国仏教へと変貌してきたのである。この過程で、互いに相手のどのような部分を受容し、どのような部分は受容しなかったのか、その結果、それぞれがどのように変容していったのか。その過程を分析することによって、二つの大きな文明それぞれの本質を明かにする手懸りが得られよう。本研究班の最終的な目標は、三教論争関係の資料をはじめとするさまざまな資料をもとに、三教交渉の諸相を分析することを通じて、中国の思想・宗教ひいては中国文化そのものの本質がいつどこにあるのかを明らかにすることである。このような作業の先には、中国を経由して仏教を受容してきた日本文化の本質もおのずから垣間見えてくるに違いない。

本研究班は、以上のような見通しのもと、六朝から唐代にいたる時期における仏道両教の交渉、なかんずく道教教理に対する仏教教理の影響に焦点を当てて共同研究を進める。具体的には、『太玄真一本際経』や『海空智蔵経』といった經典類ではなく、王玄覽『玄珠録』をはじめとする仏教教理を大幅に取り入れた唐代の道教論書のいくつかを分析の対象として、その教理構成の特色や思想的背景を解明することを主要な目的とする。

東アジア初期仏教寺院の研究

班長 岡村秀典

中国山西省大同市に所在する雲岡石窟は、北魏時代の460年に開鑿のはじまった中国最初の大規模な石窟寺院である。大同に都があった時期の20基を中心に大小140あまりの石窟が東西1キロにわたってひろがっている。本研究の前身である東方文化研究所は1938～1944年にこれを調査し、記録にとどめた写真・実測図・拓本などは数万点におよぶ。その大部の報告書『雲岡石窟』全16巻32冊(1951～56年)はいまなお中国の初期仏教文化を考える基礎資料として利用されているが、本研究所に保管する膨大な原資料を将来にわたって保存し活用していくためにも、新しい研究動向をふまえて資料を再整理する必要がでてきた。そこで、私たちは未発表のままであった瓦や土器などの発掘資料を整理して『雲岡石窟』遺物篇(2006年)として報告し、考古学の方法により雲岡石窟の新しい編年を示すとともに、仏教寺院としての景観変遷を明らかにした。また、こうした研究成果を本学総合博物館2008年度企画展「シルクロード発掘70年」としてひろく一般に公開した。

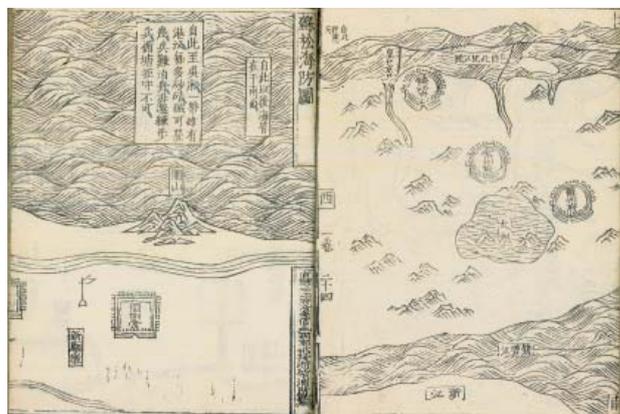
これをうけて本研究所の東アジア人文情報学研究センターでは60年あまりを経て劣化のいちじるしい写真類のデジタル化を進め、共同利用に資するための雲岡石窟資料デジタルアーカイブの構築を企画したが、本研究班はその前提として写真をはじめとする記録類を石窟ごとに整理し、考古学・美術史学・仏教史学などにおける最新の研究成果にもとづく新しい報告書の作成を目的として2010年度から3年間の期間をもって発足した。



雲岡石窟第20洞の調査風景(1940年)

東アジア地域間交渉と情報

班長 岩井茂樹



鄭若曾『江南經略』(1566年序刊本) 卷一に収められた「蘇松海防圖」

16世紀の東アジアは社会経済の転形期を経験した。日本における銀の増産やポルトガル人を嚆矢とするヨーロッパ人の来航などがその要因であった。利益の追求に促されて、人々は海洋に乗り出して交易に従事した。「天朝」をもって自認する中国の王朝は海禁と朝貢制度を有力な手段として通交秩序を維持しようとしてきたが、この中国中心の秩序は私的な交易の拡大によって動揺することになる。

それを禁圧しようとする強硬策は「海商」を「海賊」の側に追いやるという結果をもたらした。また、陸上の辺境においても、関門における互市を楨杆として商業-軍事集団が形成された。朝貢からも貿易からも排除されていたモンゴルは通貢を求めたが、明朝朝廷がこれを峻拒したため、侵攻と略奪によって圧力を加える策を選択した。こうした情勢のなかで、言語とエスニシティを超えて、国家支配の枠から外れた人々が集団の一翼を担うという現象が現れ、軍事的な衝突もしばしば発生した。近世の社会と国家は、危機を揺籃として自らを形づくることとなった。

この時代、外からの脅威に対処するという観点から、中国では域外についての知識への希求が高まり、かつてない精度と情報量をもつ著述が出現した。1550年代、蘇州出身の鄭若曾は、倭寇防衛の責務を担った総督胡宗憲の幕下において、情報の収集と戦略の策定に従事し、『江南經略』や『籌海図編』などを編纂した。この共同研究班は、鄭若曾および同時代人の著述活動に焦点をあてて、当時の域外情報の流通と集積の様相を明らかにする作業をつうじて、転形期の東アジアの地域間交渉の特質を理解することを目的とする。

北朝石刻資料の研究 II

班長 井波陵一

本研究所が所蔵する石刻資料は、重複分も含めて約1万点と言われ、内藤湖南、桑原隲藏といった碩学の名を冠したコレクションもある。かつて日比野丈夫氏が「中国金石資料の研究」（1968～1970年）という共同研究班を組織して、カード作成や写真撮影を中心に整理作業を進められ、また漢代の石刻資料については、永田英正氏を班長とする共同研究班の成果報告として『漢代石刻集成』（同朋舎出版 1994年）が出版された。

近年、情報公開が社会的使命として要求されるようになり、保存と利用という、ある意味で矛盾する事柄に、公開という第三の要素も交えて対処すべく、旧・漢字情報研究センターでは石刻資料のデジタル画像化、フリーアクセスを実現したほか、安岡孝一氏の発案と努力によって「拓本文字データベース」も公開した（それは現・東アジア人文情報学研究センターに引き継がれている）。さらに『漢代石刻集成』の掣みに倣って、『魏晉石刻資料選注』（人文科学研究所 2004年）も出版した。

続いて北朝の碑文（一部南朝のものを含む）のうち、比較的まとまった文章が残されているものを選んで訓読と語注をつける作業を行い、北魏時代までの資料について検討した。さらに今年度より東魏、北斉時代の資料を取り扱う予定である。北朝の異民族政権が「文明化の過程」の中で見せる様々な「揺れ」が、政治制度の上で、社会意識の上で、さらには文章表現や書体の上でどのような独自性をもたらしているか、様々な分野を専攻する班員諸氏の多彩



東魏侍中録尚書事高盛碑。高盛は北齊の初代皇帝である高歓の従叔祖

なコメントが楽しい。

なお、資料会読に先立って、当該碑文の拓本を広げ、先人の考証に依拠しながら細かく文字の対校を行っている。石の剥落などにより読みにくくなった箇所を凝視し、頭の中で、あるいは指先で再現しながら、文字の原形を必死になって復元していく作業も、この研究班の大きな特徴である。

南アジア北辺地域における文化交流の諸相

班長 稲葉 穰

現在のインド亜大陸と中央アジア、西アジアの間には、ヒマラヤ、カラコルム、ヒンドゥークシュなど、「世界の屋根」とも呼ばれる険しい山岳地帯がそびえ立っている。「南アジア北辺地域」というあまり聞き慣れない言葉は、これらの自然の障壁を南北に挟んだ地帯を指して用いている。歴史上、このような山岳地帯を越えて人やモノが相互に交流し、多様かつ重要な文化現象を産み出してきたことはよく知られている。人文科学研究所が行ってきた北西インド、アフガニスタン仏教遺跡に関わる発掘調査、あるいはインドと中国を往来した仏教僧の足跡をたどる研究などは、そういった文化現象の一端を明らかにするための重要な貢献となっている。



仏教徒の往来を証拠づける、インダス川上流チラス近郊のペトログリフ（2004年3月） 撮影・小倉智史

このような地域は、一般にフロンティアあるいは境界領域（zone boundary）と呼ばれるものであるが、すでにフレデリック・ターナーやオーウェン・ラティモアが明らかにしたように、それは単なる空間的な境界としてではなく、継続的に進行する政治的、社会的、あるいは文化的プロセスとして考察されねばならない。そのようなプロセスは、生態的構造と歴史的出来事の連なりの中を満たす形で、比較的緩やかに中長期的に変動すると考えられる。そこで本研究班は、時代枠を古代から近代までと広く採り、「南アジア北辺地域」に立って通時的に周囲を俯瞰することによって、いわゆるフロンティア社会の構造を探るとともに、文化伝播・文化接触・文化融合といった、普遍的かつ今日の問題を考えるための手がかりを得ようと試みている。



センター長 岩井茂樹 (兼任)
センター主任 井波陵一

史料情報学部門

教授 岡村秀典 (兼任)
准教授 安岡孝一
助教 向井佑介
助教 安藤房枝 (兼任)

言語情報学部門

教授 高田時雄 (兼任)
准教授 池田 巧 (兼任)
准教授 WITTERN Christian
(ウィッテルン・クリスティアン)
助教 守岡知彦

文献情報学部門

教授 武田時昌
准教授 宮宅 潔 (兼任)
助教 永田知之
助教 藤井律之 (兼任)

目録情報学部門

教授 井波陵一
准教授 矢木 毅 (兼任)
助教 高井たかね (兼任)
助教 山崎 岳
助手 梶浦 晋

東アジア人文情報学研究センターの前身である東洋学文献センターは、日本学術会議の勧告に基づくドキュメンテーション・センター構想の一環として、1965年4月に発足した。以来、人文科学研究所の前身の一つである東方文化学院京都研究所がおこなってきた資料収集および学術情報公開の事業を継承発展させる形で、漢字文献の収集や目録の編纂に努めるとともに、東洋学へのコンピュータ利用にもいち早く取り組み、1980年代には『東洋学文献類目』のデータベース（毎年約2万件）を年度ごとに作成、公開して、現在に至っている。また漢字文献のデジタル化を本格的に推進するために、2000年4月、情報学の研究者を専任スタッフに加えて漢字情報研究センターに改組し、デジタル・テキストやデジタル・カタログの作成において内外から高い評価を受けている。

所蔵資料をたんにデジタル化するばかりではなく、たとえば石刻拓本資料の場合、先行して作成された拓本全体のデジタル画像に基づいて、様々な書体で刻まれた元の文字と今日一般的に使われる文字とを画面上で対応させる「拓本文字データベース」を構築することにより、時代ごとの書体の変遷や流行を追跡できるようにした。王国維の「史籀篇疏證」や「戦国時秦用籀文六国用古文説」における指摘ではないが、旧字と新字と言われると、旧字が先にあり新字が後に続くという単線の発展史をついつい思い浮かべてしまう。しかし「拓本文字データベース」で「來」もしくは「来」を検索すると、文字成立の専門的考証はともかくとして、両者がいかに日常的に混在、共存してきたかという事実を突きつけられ、改めて驚かざるを得ない。



連携事業

全国漢籍データベースの構築

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

【幹事機関】

- 国立情報学研究所
- 東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター
- 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究中心
- 全国漢籍データベース協議会
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/>

単独事業

雲岡石窟資料デジタル・アーカイブの構築

人文科学研究所共同研究「東アジア初期仏教寺院の研究」班の項（31ページ）参照

定期刊行物

『東洋学文献類目』、『東方学資料叢刊』、『漢字文化研究年報』

漢籍担当職員講習会

初級・中級、各年1回5日間

セミナー

1. TOKYO 漢籍 SEMINAR
2. 東洋学へのコンピュータ利用研究セミナー

データベースの構築と公開

東洋学文献類目、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料、拓本文字データベース、京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文字、西域行記データベース、東洋学デジタル図書館、所蔵中国雑誌目録など

また他の大学図書館や公共図書館との連携事業である全国漢籍データベースの場合も、たんにそれぞれの漢籍目録をデータベース化するのみならず、テキストの画像を附加することで、版本研究における利便性を向上させることに努め、さらに本センターが所蔵する漢籍については、テキストの構成や出版に関する所内研究会の調査結果をそのつど公開することで、データベースの利用価値を高めている。さらに毎年3月に開かれる全国漢籍データベース協議会総会では、この研究会の成果を直接公開すべく、「普通の本でも十分におもしろい」と銘打って、目録情報からは見えてこない「本を手にする楽しみ」を、実物を目の前に置いて解説している。この試みは今後も続けてゆきたい。

さらにデジタル・テキストやデジタル・カタログの作成におけるこうした実績を踏まえて、本センターではフィールド研究史料（たとえば発掘調査における多数の写真資料）をデジタル化することで、研究者にとってよりいっそう有用な学術情報を提供していきたいと考えている。人文科学研究所の共同研究は、古典文献の精密な読解と詳細なフィールド調査を二つの大きな柱としており、それは東方文化学院京都研究所以来、東アジア研究においても変わらない。東洋学文献センターと漢字情報研究センターでは、おもに前者、すなわち古典文献の精密な読解を推進するために文献収集やデータベース作成に取り組んできたが、学術情報の提供という点から言えば、今後は必然的に後者のフィールド調査史料をデジタル化して研究の発展に寄与することが求められる。

たとえば1938年に始まった雲岡石窟の調査は、1945年3月の東京大空襲により製版中の報告書原稿が焼失するという打撃を蒙りながら、1951年に『雲岡石窟』と題されてその第1冊が刊行され、それを時の首相吉田茂がサンフランシスコにおける講和条約締結の際に持参したことはよく知られている。最終的に全16巻32冊に達した『雲岡石窟』は、人文科学研究所の数ある成果報告書の中でも抜群の存在感を誇っている。だが言うまでもなく、この巨大な報告書を生み出した原資料として膨大な調査記録や写真が残されており、それらは今でも研究所の一隅に保管されている。調査開始から70年以上、報告書刊行から半世紀以上経過した今日、デジタル化技術の進展に伴い、原資料が再び脚光を浴びることになった。内容や撮影場所を特定して公開した写真資料を、世界中の人々がインターネット上で直接利用できるようなれば、雲岡石窟の歴史的、文化的あるいは宗教的意義を深く認識できるようになるし、専門家には『雲岡石窟』の基礎となる貴重な資料として歓迎されるであろう。

以上のような展望に基づき、東洋学と情報学の融合をより一層推進するという使命を果たすべく、2009年4月、東アジア人文情報学研究中心に改組し、新たなスタートを切ることになった。

本センター（<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>）が現在展開している主要な事業は左記の通りである。

東アジア人文情報学研究センター利用規程

平成15年12月8日制定 平成21年2月12日改正

趣旨

第1条 京都市大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター（以下「センター」という。）が保有する東洋学関係の文献その他の資料（以下「図書資料」という。）の利用は、この規程の定めるところによる。

図書資料

第2条 センターに、次の図書資料を置く。

- ①貴重書
- ②普通書
- ③参考図書
- ④逐次刊行物
- ⑤その他の資料

利用者

第3条 図書資料を利用できる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げるものとする。

- ①京都市大学人文科学研究所（以下「本研究」という。）の教職員
- ②本研究の名誉教授及び名誉所員
- ③本研究の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者及びこれに準ずる者
- ④本研究の共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑤本研究以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑥本学の大学院生及び学生
- ⑦図書資料の利用を申し出た学外者

閲覧場所

第4条 図書資料の閲覧は、閲覧室内で行うものとする。

開室時間

第5条 閲覧室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前9時30分から正午及び午後1時から4時30分までとする。ただし、図書資料の出納は午後4時までとする。

休室日

第6条 閲覧室の休室日は、次のとおりとする。

- ①土曜日及び日曜日
- ②国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
- ③本学創立記念日（6月18日）
- ④夏期曝涼（8月1日から8月15日）
- ⑤年末年始（12月26日から翌年1月5日）
- ⑥毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日にあたる場合は、次の開室日）

2 センター長が、特に必要と認めるときは、臨時に閲覧室の業務の一部又は全部を休止することができる。

閲覧室利用登録

第7条 第3条第2号から第7号に掲げる者が閲覧室の利用を希望する場合は、所定の京都市大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター閲覧室利用申込書を閲覧室の受付（以下「閲覧受付」という。）に提出し、京都市大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター閲覧室利用カード（以下「利用カード」という。）の交付を受けるものとする。ただし、申込みの日に限って利用を希望する者については、利用カードの交付を省略することができる。

2 利用カードの交付を受けた者は、次回以降閲覧室に入室する際、利用カードを閲覧受付に提出するものとする。

3 利用カードの有効期間は、交付日の属する年度の末日を超えない範囲内でセンター長が定める。

自由閲覧

第8条 開架の図書資料は、閲覧室で自由に閲覧することができる。

書庫内図書資料の閲覧

第9条 書庫内の図書資料の閲覧を希望する者は、閲覧申込書を閲覧受付に提出するものとする。

2 同時に閲覧できる図書資料は、5点以内とする。

3 図書資料の返却は、閲覧受付において掛員の確認を得て行うものとする。

閲覧の制限

第10条 センター長は、次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することができる。

- ①図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第5条第1号、第2号及び第4号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
- ②図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第5条第2号に規程する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
- ③図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損もしくはその汚損を生じのおそれがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

利用の制限

第11条 閲覧室が非常に混雑している場合等、本センターの教育・研究活動に支障をきたすおそれがある場合においては、センター長は閲覧室の利用を制限することができる。

複写

第12条 利用者は複写を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には図書資料の複写は行わない。

- ①著作権の侵害となるおそれのあるとき
- ②図書資料が複写により破損するおそれのあるとき
- ③原所蔵者との契約に反するおそれのあるとき
- ④特に時間を要し、他の業務に支障を生ずるおそれのあるとき

2 複写を依頼しようとする者は、所定の複写申請書を閲覧受付に提出し、センター長の承認を受けなければならない。

3 複写料金の取扱いについては、別に定める。

貸出

第13条 貸出は、第3条第1号に掲げる者に対する、研究室貸出に限っておこなう。ただし、センター長が特に必要と認められた場合はこの限りではない。

2 研究室貸出に関する期間、冊数、その他の制限は別途定める。

転貸の禁止

第14条 利用者は、貸出中の図書資料を他者に転貸してはならない。

返却

第15条 貸出を受けた図書資料は、貸出期間内に返却しなければならない。

2 利用者は、貸出期間内であってもその利用資格を失ったときは、ただちに借用している図書資料を返却しなければならない。

3 センター長が特に必要と認めるときは、貸出中の図書資料の返却を求めることがある。

書庫内検索

第16条 書庫内検索は、第3条第1号から第2号に掲げる者にとっては、掛員に身分証を提示して入庫することができる。

利用者の責任

第17条 利用者は、図書資料に含まれる情報を利用することによって著作権、プライバシー等第三者の権利利益を侵害したときは、その一切の責任を負うものとする。

参考調査

第18条 利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術にかかる調査及び情報の提供を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には参考調査を行わないことができる。

- ①図書資料の鑑定、解読若しくは翻訳、学習課題の回答その他のセンターの業務として対応することが適当でないと認められるとき
- ②回答に著しく費用又は時間を要することが明らかである場合等、他の業務の遂行に著しい支障を及ぼすおそれがあるとき

弁償の責任

第19条 利用者は、その責に帰すべき事由により、施設、物品又は図書資料を滅失し、破損し、若しくは汚損したときは、その損害を賠償するものとする。

利用の停止

第20条 センター長は、他の利用者に迷惑を及ぼした者又は及ぼすおそれのある者並びに図書資料を滅失、破損若しくは汚損を生じさせた者又は生じさせるおそれのある者に対して、退室を命じ、又は入室を拒否することができる。

2 センター長は、この規則若しくはその他の規則に違反し、又はセンター長の指示に従わない者に対して、図書資料の利用を停止することができる。

雑則

第21条 利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室内に備え付けるものとする。

第22条 この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

改正

第23条 この規程の改正は、センター専門委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附則（平成15年12月8日制定）

1. この規程は、平成16年4月1日から施行する。
2. 漢字情報研究センター図書室利用規程（平成12年4月1日制定、平成13年3月7日改正）は廃止する。

附則（平成21年2月12日制定）

この規程は、平成21年2月13日から施行する。



附属研究施設

現代中国研究センター



かつての「革命聖地」延安も、改革・開放 30 年を経て、高層ビルの建ち並ぶ都市へと変貌した

センター長 森 時彦
センター主任 石川禎浩

教授 森 時彦 (所内兼任)
岩井茂樹 (所内兼任)
籠谷直人 (所内兼任)
江田憲治 (学内兼任)
大西 広 (学内兼任)
平田昌司 (学内兼任)
准教授 石川禎浩 (専任)
袁 広泉 (客員)
池田 巧 (所内兼任)
助教 小野寺史郎 (専任)

現代中国研究センターは、現代中国についての研究を重点的に推進するとともに、京都大学における現代中国研究者が持続的な共同研究を行うための拠点を構築することを目的として、2007年4月1日に設置された新しい附属研究施設である。本センターは、人間文化研究機構(大学共同利用法人)による「地域研究推進事業」の一環として、同年4月に同機構と京都大学とによって共同設置された「現代中国地域研究京都大学拠点」の実体的組織である。同機構は、京都大学のほかに、慶應義塾大学(東アジア研究所現代中国研究センター)、東京大学(社会科学研究所現代中国研究拠点)、早稲田大学(アジア研究機構現代中国研究所)、財団法人東洋文庫(現代中国研究資料室)、総合地球環境学研究所(中国環境問題研究拠点)とそれぞれに研究拠点を共同設置したが、本センターは、現代中国地域研究を進めるこれら5拠点と連携して、ネットワーク型の共同研究を実施している。

近年の中国の政治、経済分野におけるめざましい台頭に伴い、日本の中国研究も、近現代および現在の中国を分析する新たなアプローチ・手法を要請されていることは言うまでもない。「東洋学」の豊かな資産を含めて、京都大学の中国研究のレベルは世界でも高水準にある。だが、21世紀を迎えた今日、京都大学の中国学はこれまでの研究体系に加えて、同時代的かつ動的なアプローチを求められている。すなわち、人文科学研究所をはじめとして、学内の関係諸部局がこれまで蓄積してきた豊富な研究リソースを十分に活用し、かつ学内の研究者が深化させてきた高水準の個別研究を有機的にむすびつける必要があろう。本センターは、この課題に応えるべく設置されたのである。

人間文化研究機構が国内の各大学・研究機関と共同設置した「現代中国地



人文研のホームページに掲げられている現代中国研究センターのアイコン



チベット・ラサ市内で警備にあたる武装警察部隊(2010年8月)。少数民族地域の統治は、現代中国の安定を占う問題である



近現代中国の新聞などを収蔵しているセンターの「現代中国情報資料集積基地」

域研究拠点」は、各拠点の得意分野・特色を生かしつつ「現代中国」を分担研究しているが、本センター(京大拠点)は、京都大学がこれまで培ってきた人文系中国学の蓄積を踏まえ、「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」を総合研究テーマとし、「深みのある現代中国研究」を推進することを掲げている。「深みのある現代中国研究」とは、単に現在の中国がどうなっているのかを検討するだけではなく、現代の中国は如何にして形成されたのかを、人文的・歴史学的パースペクティブから分析するという含意である。

人員の面では、専任教員3名(うち1名は人間文化研究機構から派遣された研究員で、本研究所にあっては客員准教授に相当)、所内兼任4名、学内兼任3名を配置し、所外委員を含む運営委員会のもと、学外の教員、研究者を受け入れる二つの研究グループ(研究グループ1「現代中国文化の深層構造」、同2「現代中国政治の社会基盤」)を設け、両グループは連携して、関連資料の収集および研究を進めている。主な活動としては、石川禎浩准教授を代表者とする研究グループ1が従来の共同研究班「中国社会主义文化の研究」に引き続き、2010年度より「現代中国文化の深層構造」共同研究班を開催しており、他方、森時彦教授を代表者とする研究グループ2が、2008年度より「長江流域社会の歴史景観」共同研究班を開催している。両研究班は、それぞれ隔週金曜日に定例の研究会を開催し、現代中国の深層構造を人文学、とりわけ歴史学の立場から解明する課題に取り組んでいる。

人文科学研究所の研究棟の移転に伴い、現代中国研究センターも2008年4月に人文研新館4階に移転し、研究拠点としての姿を現した。センターの関連施設としては、工具書・CNKI用パソコン端末・会議用テーブルを備えた「現代中国共同研究室」と近現代中国の新聞・新編地方志・地図を収蔵し、デジタルマイクロフィルムスキャナを備えた「現代中国情報資料集積基地」がその中心に位置する。「現代中国共同研究室」と「現代中国情報資料集積基地」では、収集された諸資料・データベース・地図などが、広く関連研究者の利用に供されている。

中国の変容が長期に続く、史上空前のものであることを考えれば、ネットワーク形成や共同研究を通じて現代中国研究のレベルアップをはかることは、避けて通れない長期的課題である。本センターはその課題に立ち向かう研究集団の中核たらんとしているのである。



中国近現代史の共同研究班、研究者が出版した報告論文集、資料集、著作など



附属研究施設

人文学国際研究センター

教授	田中雅一 (兼任)
教授	稲葉 穰 (兼任)
助教	小池郁子 (兼任)
客員教授	VITA, Silvio (ヴィータ・シルヴィオ)
客員准教授	JACQUET, Benoit (ジャケ・ブノワ)

人文学国際研究センターは、人文学研究のための国際拠点として、2006年4月、本研究所附属施設として設置された。現在は兼任・客員総計5名のスタッフを置き、人文学にかかわる先端的研究の活性化と関連する成果の発信を目指している。

主たる活動内容としては、以下の四つがあげられる。

1 人文学に関わる公開セミナーの開催／国際シンポジウムの開催

国内外の研究者および研究成果の有機的連携と総合に資するべく、現在のところシンポジウムについては、2008年度には中央アジア古代の美術史・考古学に関わる「Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources」を開催した。

外国人スピーカーを招いた公開セミナーを数ヶ月に一度のペースで開催している。主なものを挙げると、2006年度はラフル・シュリヴァスタヴァ氏がインドのスラム街について、2007年度はデイヴッド・チデスター教授（ケープタウン大学）が19世紀後半の植民地支配と宗教に関して、2008年度にはフィロメナ・キート氏（法政大学講師）が原宿のストリート・ファッションについて、また、イムレ・ガランボス氏（大英図書館研究員）が10世紀の敦煌文書中に見える旅行記について、それぞれ講演を行った。2009年度はポーリン・ケント氏の『菊と刀』再考、ジン・ベエイク氏（ペンシルヴァニア大学）による和辻の『風土』論再考、また2010年度には、アリエラ・J・グロス南カリフォルニア大学教授の人種差別の歴史、ケイト・マクダナルド氏による戦前・戦中の「鮮満」観光についての講演がなされた。今後も他の研究機関などと連携しつつ、同様のシンポジウム、公開セミナーを主催していく予定である。



イラン西部に残る中国風龍のレリーフ。モンゴル時代



ネイティブ・アメリカンの祭り「パウワウ」。イギリス



国際シンポジウム「Afghanistan Meeting 2008」



公開セミナー「コンタクト・ゾーンという視点」

2 内外の研究者の交流の促進と研究ネットワークの構築

国際研究センターの設置目的は人文学研究のための国際連携拠点を築くことにある。国際研究センター自体は人文科学研究所の附属施設として設置されているが、この目的をより十全に実現するため、従来より様々な分野において協働してきたイタリア国立東方学研究所所長およびフランス国立極東学院京都支部長を、人文科学研究所客員教授、准教授として迎え、よりいっそうの研究連携強化をはかっている。両研究機関は、2007年9月に設立された全ヨーロッパ規模のアジア研究協議会であるEuropean Consortium for Asian Field Study (ECAAF) の中核機関でもあり、今後、人文学研究の分野における日本とヨーロッパの研究交流がさらに多角化、深化していく過程で、人文学国際研究センターが日本側の窓口の一つとして機能するよう、現在、様々な面から協議検討を進めている。

3 基幹プロジェクトと連携プロジェクトの実施

一方で実際に共同研究を遂行するためにはなんらかの研究の枠組み、すなわち具体的プロジェクトが必要となる。国際研究センターでは現在「基幹プロジェクト」と「連携プロジェクト」と名付ける二つのプロジェクトを展開している。前者については「複数文化接触領域(コンタクト・ゾーン)の人文学」というテーマのもと、2006年のセンター発足時から共同研究班を組織し、2010年3月終了後は、「トラウマ経験の組織化をめぐる領域横断的研究」や「南アジア北辺地域における文化交流の諸相」を開始した。研究班員として地域研究や歴史研究、文化研究、ポストコロニアル研究、文化人類学などの専門家を迎え、グローバル化が進む現代社会にとって喫緊の課題であるところの、異文化理解や他者との共存のあり方について議論を重ねている。

後者については、「近代日本と異文化接触」というテーマのもと、客員教授を班長とする共同研究を組織している。そこでは、主に国外の研究者を招いて、国際的な視野、視点からの日本社会の様態と、近代世界における異文化接触のあり方についての研究報告、討論を行っている。

4 成果の公刊

これらの研究プロジェクトの成果は、上述の公開セミナーやシンポジウムの他に『Contact Zone コンタクト・ゾーン』誌上に発表されている。同誌は年1回の刊行で、現在まで3号が刊行されている。創刊号は、二つの講演会の記録と9本の学術論文を、第2号は、講演会の記録1本と論文10本、書評1本、第3号には講演記録1本、論文10本を掲載している。



定期刊行物『Contact Zone コンタクト・ゾーン』



本研究所の蔵書は2010年3月31日現在約57.4万冊、そのうち人文学研究部・東方学研究部の和書・洋書が本館に、東方学研究部の漢籍・中国書が分館（附属東アジア人文情報学研究センター）に所蔵されている。これまでの共同研究とのかかわりで人文学研究部には明治維新、第一次世界大戦後の社会・労働問題、第二次世界大戦期の諸問題や家族問題関係の書籍が多く、18-19世紀のフランス文献も集まっている。最近では、近代日本と東アジアに関わる文献、明治初期の西欧人の日本見聞記や万国博覧会関係の図録集などの収集等にも注意が向けられている。東方学研究部のものは旧東方文化研究所と旧人文科学研究所の漢籍が主軸で、旧中国関係の文献の収蔵では世界有数の質を誇る。民国時代の蔵書家陶湘氏の旧蔵漢籍約28,000冊を中核とし、とくに叢書が完備している。研究に直接役立つことを指標に、貴重書よりも信頼できる版本を網羅的に補充する方針がとられ、1948年には漢籍総数97,000冊に達した。統合により旧人文科学研究所の漢籍47,000冊を加え、その後も鋭意充実に努めている。

文庫として、村本文庫、中江文庫、矢野文庫、松本文庫、内藤文庫、サン＝シモン・フーリエ文庫、桑原文庫、河野文庫、田中文庫、安文庫等がある。本研究所の2010年3月現在の蔵書数は、和書155,943冊、中国書331,880冊、洋書85,700冊、合計573,523冊であり、また逐次刊行物の所蔵タイトル数は、和文2,599種、中文2,844種、朝鮮・韓国文143種、欧文828種である。

図書の整理（分類）は和洋書および主として辛亥革命以後の中国書については日本十進分類法により、漢籍を中心とする蔵書は、経学・史学・諸子・詩文の書籍をそれぞれ収める経・史・子・集の四部の他に、各部にわたる書籍を収める叢書部を加えた五部分類法によっている。

本図書室も国立情報学研究所の主管する「学術情報ネットワーク」に参加しており、1988年6月から受け入れた和洋書について、端末機により目録を作成し、同研究所「総合目録データベース」形成の一翼をになっている。また辛亥革命以後の中国書についても、2002年4月より同様に入力を開始した。

蔵書統計（年代別内訳）

年	和文	中国文	欧文	計(冊)
1955	22,837	58,974	1,201	83,012
1967	45,733	187,650	21,573	254,956
1975	64,167	214,231	31,866	310,264
1986	97,150	265,239	49,623	412,012
1995	122,470	293,732	65,838	482,040
2000	131,630	305,994	73,685	511,309
2005	140,973	317,451	78,081	536,505
2008	147,462	326,818	81,734	556,014
2010	155,943	331,880	85,700	573,523

特殊文庫

村本文庫	村本英秀氏（元朝日新聞社員）旧蔵書	漢籍	8,484冊
中江文庫	中江丑吉氏旧蔵書	漢籍 洋書	6,037冊 728冊
松本文庫	松本文三郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	和書 漢籍 洋書	3,889冊 6,471冊 1,096冊
内藤文庫	内藤虎次郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	漢籍 和書 洋書	1,636冊 100冊 271冊
矢野文庫	矢野仁一氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	和漢洋書	697冊
サン＝シモン・フーリエ文庫		洋書	211冊
桑原文庫	桑原武夫氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	洋書	1,047冊
田中文庫	田中峰雄氏（甲南大学教授）旧蔵書	洋書	947冊
河野文庫	河野健二氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	洋書	647冊
安文庫	安 秉珪氏（朝鮮史研究者）旧蔵書		1,161冊

人文科学研究所図書室利用規程

平成6年3月10日制定／平成12年1月27日改正／平成15年11月27日改正／平成20年11月13日改正

趣旨

第1条 京都大学人文科学研究所図書室（以下「図書室」という。）の利用は、この規程に定めるところによる。

図書資料

第2条 図書室に、次の図書その他の資料（以下「図書資料」という。）を置く。

- ①貴重書
- ②普通図書
- ③参考図書
- ④逐次刊行物
- ⑤視聴覚資料
- ⑥その他の資料

利用者

第3条 図書室を利用できる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げる者とする。

- ①本研究所の教職員
- ②本研究所の名誉教授及び名誉所員
- ③本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者及びこれに準ずる者
- ④本研究所の共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑤本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑥本学の大学院生及び学生
- ⑦図書室の利用を申し出た学外者

開室時間

第4条 図書室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前9時から午後5時までとする。
2 所長が特に必要と認めるときは、前項に定める開室時間を変更することができる。

休室日

第5条 図書室の休室日は、次のとおりとする。
①土曜日及び日曜日
②国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
③本学創立記念日（6月18日）
④本研究所創立記念行事開催日
⑤8月1日から8月15日
⑥12月26日から1月5日
⑦毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日に当たるときは、次の開室日）
2 所長が特に必要と認めるときは、臨時に休室又は開室することができる。

利用方法

第6条 図書室利用の方法は、次のとおりとする。
①閲覧
②貸出
③書庫内検索
④参考調査

閲覧

第7条 閲覧は、所定の場所で行うものとする。
第8条 利用者は、次のとおり図書資料を閲覧することができる。ただし、試験期間中において閲覧室が非常に混雑している等、本研究所の教育・研究に支障をきたす恐れがある場合においては、図書資料の閲覧利用を制限することができる。

①開架図書は、閲覧室で自由に閲覧することができる。

②書庫内図書及び視聴覚資料については、所定の手続きを経て所定の場所で閲覧することができる。

2次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することができる。

- ①図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第5条第1号、第2号及び第4号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
- ②図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第5条第2号に規定する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
- ③図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損若しくはその汚損を生じる恐れがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

貸出

第9条 第3条第1号から第6号に掲げる者は、図書資料の貸出を受けることができる。ただし、次の各号に掲げる図書資料の貸出は行わない。

- ①貴重書
- ②事典、辞書及び目録類の参考図書
- ③視聴覚資料
- ④その他所長が特に指定したもの

貸出の手続き

第10条 貸出（一時帯出を含む）を希望する者は、職員証又は学生証その他所属、身分を証明するもの（以下「身分証」という。）を提示し、所定の手続きを経なければならない。

貸出期間及び冊数

第11条 図書資料の貸出期間及び冊数は、次のとおりとする。

- ①本研究所の教職員
2年以内 400冊以内
- ②本研究所の名誉教授及び名誉所員
1年以内 30冊以内
- ③本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者、共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
1月以内 30冊以内
- ④本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
1月以内 5冊以内
- ⑤本学の大学院生、学生
2週間以内 5冊以内

2 第3条第1号に掲げる者への雑誌（製本・未製本）の貸出期間は、次の開室日までとする。

3 第3条第2号から第6号に掲げる者への雑誌（製本・未製本）の貸出期間は、その日に限り一時帯出することができる。

4 所長が特に必要と認めるときは、貸出期間及び冊数を変更することができる。

転貸の禁止

第12条 利用者は、貸出中の図書資料を他の者に転貸してはならない。

研究室貸出

第13条 研究室貸出については別途定める。

返却

第14条 貸出を受けた図書資料は、貸出期間内に返却しなければならない。
2 利用者は、貸出期間内であってもその利用資格を失ったときは、ただちに借用している図書資料を返却しなければならない。
3 所長が特に必要と認めるときは、貸出中の図書資料の返却を求めることがある。

書庫内検索

第15条 書庫内検索は、第3条第1号から第5号に掲げるものおよび本学の大学院生にあっては、掛員に身分証を提示して入庫することができる。
2 本研究所の共同研究班参加者については、班長の許可のもとに「図書室利用証」を発行し、身分証に代えるものとする。

参考調査

第16条 利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術に係る調査及び情報の提供を依頼することができる。
2 前項の調査を求められた場合において、特に経費又は時間を要し、他の業務に支障のきたす恐れのある調査については、回答を行わない。

事故の届出及び処置

第17条 利用者は、利用している図書資料に汚損、破損又は紛失等の事故を生じさせたときは、ただちにその旨を所長に届け出なければならない。
2 所長は、前項の事故を生じさせた利用者に対し弁償を求めることができる。

利用の停止

第18条 この規程に違反した者には、図書室の利用を停止することができる。

雑則

第19条 利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室に備え付けるものとする。
第20条 この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、所長が定める。

附則（平成6年3月10日制定）

1 この規程は、平成6年4月1日から施行する。
2 京都大学人文科学研究所図書・資料取扱規程（昭和25年6月8日制定）は廃止する。

附則（平成12年1月27日制定）

1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。
2 本研究所附属漢字情報研究センター図書資料の利用は、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター利用規程による。

附則（平成15年11月27日制定）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則（平成20年11月13日改正）

この規程は、平成21年1月1日から施行する。



研究・教育経費

支出決算等 (単位円)

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
人件費	704,392,203	688,231,990	636,028,061
物件費	121,892,989	128,282,358	124,365,860
出版費	1,598,345	8,380,140	4,333,757
図書費	24,744,487	24,240,943	25,923,383
その他	124,174,424	206,103,645	225,614,946
総決算額	976,802,448	1,055,239,076	1,016,266,007
物件費／出版・図書を含む			
	148,235,821	160,903,441	154,623,000

平成 22 年度 その他の外部資金 (\$ 以外単位千円)

受託研究	●科学技術振興機構 加藤和人 9,425 科学技術と社会の相互作用(市民と専門家の熟議と協働のための手法とインタフェース組織の開発)
	●科学技術振興機構 加藤和人 5,000 京都大学 IPS 細胞研究統合推進拠点(再生医療の実現化プロジェクト)
共同研究	●人間文化研究機構 森 時彦 10,000 現代中国地域研究(①現代中国文化の深層構造 ②現代中国政治の社会基盤)
	●人間文化研究機構 水野直樹、籠谷直人 4,500 植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究
寄附者	●蔣経國國際學術交流基金會 WITTERN, Christian (MONICA, Esposito) \$19,998 Canonical Texts of Ming and Qing Daoism: The Daozang jiyao and the Role of Lay and Clerical Authorities (明清道教の經典テキスト)
	●財団法人 稲盛財団(平成 22 年度稲盛財団研究助成) 立木康介 1,000 精神病か倒錯か?—ポスト神経症時代に支配的・心的構造および心的経済の精神分析的解明

平成 22 年度科学研究費補助金配分一覧 (単位千円)

研究種目	研究代表者氏名	直接経費	名称(研究課題名)
基盤 S	富谷 至	14,400	東アジアにおける儀礼と刑罰—礼的秩序と法的秩序の総合的研究
基盤 S	竹沢泰子	29,700	人種表象の日本型グローバル研究
小計	2件	44,100	
基盤 A	麥谷邦夫	9,600	『道蔵輯要』と明清時代の宗教文化
小計	1件	9,600	
基盤 B	船山 徹	3,900	中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性
基盤 B	藤井正人	2,600	南インド現存二学派の収集諸写本に基づくヴェーダ新資料の校訂と研究
基盤 B	高木博志	3,000	近代古都研究—歴史と都市をめぐる学際的研究
基盤 B	宮宅 潔	3,500	中国古代軍事制度の総合的研究
基盤 B	岩井茂樹	3,100	14—20世紀初頭における「朝貢」・「互市」と東アジア世界秩序の変容の研究
基盤 B	田中雅一	3,400	アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究
基盤 B	岡村秀典	3,100	中国の初期仏教寺院とその源流にかんする考古学的研究
基盤 B	山室信一	3,800	一九二〇世紀転換期における「戦争ロマン」の表象についての比較文化史的研究
基盤 B	高田時雄	2,700	ロシアに所蔵される敦煌吐魯番等発見漢文文献の研究
基盤 B	安岡孝一	6,200	形態素解析のための品詞情報つき古典漢文コーパスの構築
基盤 B	石川禎浩	3,800	近現代中国における政党文化史についての基礎的研究
小計	11件	39,100	
基盤 C	籠谷直人	1,000	アジア・ネットワークにおける制度と生存基盤に関する基礎的研究
基盤 C	武田時昌	1,000	中国占術理論の形成
基盤 C	岡田暁生	800	第一次世界大戦期ドイツにおける「音楽と社会」ならびに一九二〇年代へのその影響
基盤 C	小林文広	1,000	近代都市制度の基礎的研究—「区」をめぐって
基盤 C	稲葉 穰	1,000	前近代アフガニスタンに関する歴史地理的研究と地名コーパスの作成
基盤 C	古勝隆一	1,300	中国近代文献学—余嘉錫の総合的研究
小計	6件	6,100	

若手 B	田中祐理子	800	20世紀における「生物／無生物」概念の研究—思想史と医学史の視角から
若手 B	高井たかね	900	明清時代における生活空間の研究—家具とその使用を中心として
若手 B	宮 紀子	1,000	東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証
若手 B	山崎 岳	900	明清時代の華南とヴェトナム
若手 B	向井佑介	600	中国北朝の諸民族と文化の融合に関する考古学的研究
若手 B	小池郁子	1,000	性からみるオリシャ崇拝の変容—アフリカ由来の宗教を実践するアメリカ黒人の社会運動
若手 B	安藤房枝	900	北魏仏教石窟における交脚菩薩形弥勒の伝播と受容—雲岡初・中期窟の編年問題を中心に
若手 B	久保昭博	700	第一次世界大戦戦争文学におけるリアリズムの構造についての文体論的研究
若手 B	古松崇志	1,200	10—13世紀ユーラシア東方における外交儀礼と国際秩序
若手 B	石井美保	900	南インドにおける神霊祭祀と憑依儀礼に関する人類学的研究
小計	9件	8,900	
若手 B (繰越)	石井美保	436	南インドにおける神霊祭祀と憑依儀礼に関する人類学的研究
小計	1件	436	
研究成果・学術図書	竹沢泰子	2,800	Racial Representations in Asia
研究成果・学術図書	富谷 至	6,800	Capital Punishment in East Asia
小計	2件	9,600	
研究成果・データベース	安岡孝一	4,900	漢文字体変遷研究のための拓本文字データベース
研究成果・データベース	井波陵一	2,800	新・全国漢籍データベース
小計	2件	7,700	
研究活動・スタート支援	松嶋 健	1,130	イタリアの精神保健実践における生態学的インタラクション環境の文化生態人類学的研究
小計	1件	1,130	
総計	35件	126,666	



教育活動と社会貢献

人文科学研究所は、多彩な研究活動に主軸をおく一方、新しい世代の研究者を育成する教育活動にも力を注いでいる。また、研究成果の還元等を通じた社会貢献のための活動にも積極的に取り組んでいる。



教育活動

教育活動のうち、人文科学研究所がもっとも力を入れているのは大学院教育である。文学研究科では、文献文化学、思想文化学、歴史文化学、現代文化学の4専攻において17名の教授・准教授が協力講座を兼担し、院生の教育および研究指導に当たっている。また人間・環境学研究科では、共生文明学専攻において教授2名が協力講座に準ずるかたちで、地球環境学堂・学舎・三才学林では「両任制」による教授1名が、生命科学研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科ではそれぞれ准教授1名が兼任教員として協力している。これ以外にも、授業担当あるいは非常勤講師として、毎年度10数名の教員が文学研究科をはじめとする複数の研究科に出講している。大学院教育担当者の多くは学部学生にも開かれた授業を担当しており、全学共通科目や新生入生を対象とする少人数セミナー（いわゆる「ポケットゼミ」）にも数科目を提供している。また、後述する「人文研アカデミー」の枠内でも常時複数の全学共通科目を提供している。

本研究所の教育活動の中で特筆すべき点は、研究所の中核活動である共同研究そのものを通じて、学内外の博士課程以上の学生に対する専門的研究能力養成の場を提供していることである。学内外、国内外の幅広い専門家が集う共同研究の場で、先進的な研究や精緻なテキスト会談に参加し、多角的な討論の輪に加わる機会を与えることこそは、大学院教育の枠を越えた研究所独自の若手研究者育成機能といえるであろう。研究所ではまた、国内外からの研究生や研修員、ならびに日本学術振興会の特別研究員等を広く受け入れ、共同研究への参加、文献解読や論文執筆のための個人指導等を通じて、若手研究者の育成に努めている。

社会貢献

人文科学研究所の社会貢献活動としては、「人文研アカデミー」による定期講演会、各種講座・教室、シンポジウム、レクチャーコンサート等の開催があげられる。これは一般市民や学生を対象とする、研究所の共同研究や個人研究の成果を広く社会に還元するための活動で、近年は京都市生涯学習総合センター、NHK文化センター、関西日仏学館等との共催プログラムにも力を入れている。

附属漢字情報研究センターが開催する漢籍担当職員講習会およびTokyo漢籍Seminarも、社会貢献活動の一環である。漢籍担当職員講習会は、漢籍に関する専門知識を有する図書館職員の養成を目的とするもので、初級および中級の級別講習会を毎年度開催している。また2004年度からは年1回、一般への漢籍知識および東洋学の普及を目的とするTokyo漢籍Seminarを東京で開催している。



第6回漢籍セミナーのポスター



出版物・著作

人文科学研究所の出版物は、定期的に刊行される「紀要」および『東洋学文献類目』と不定期に出版される研究報告に分けられる。「紀要」には、邦文の『東方学報』『人文学報』と、欧文の『ZINBUN』がある。1931年に創刊された『東方学報』は、毎年1冊以上発行され、現在85冊に至っている。東方学研究部所員と共同研究班員の論文を掲載し、日本の東洋学界を代表する雑誌のひとつとあってよいだろう。旧人文からは戦前に『東亜人文学報』、戦後は『人文科学』が刊行されていた。1950年以降、旧日本部と旧西洋部所員や共同研究班員の研究発表誌として『人文学報』が発行されており、現在までに99号を数える。また、1975年より欧文紀要『ZINBUN』が加えられ、両部所員等が交代で執筆し、現在41冊に達している。『東洋学文献類目』は1935年に始まる『東洋史研究文献類目』を1966年に改称したもので、各年度ごとの日本、中国、欧米の東洋学関係の論文と研究書を網羅した目録である。本書は内外の学界から需要が多く、2010年までに既刊60冊を数え、1981年度以降はウェブサイト上で公開されている。

不定期刊行物としては、所員の個人研究と共同研究班の研究報告があり、旧東方文化研究所以来刊行された報告書の数は約180にのぼる。このほか、イラン・アフガニスタン・パキスタンの学術調査報告や、38冊に及ぶ内外調査の報告書がある。

人文科学研究所研究報告書

徴兵制と良心的兵役拒否 (人文書院)	2010	小関 隆 著	元刊雑劇の研究 ——三奪槩・気英布・西蜀夢・単刀会 (汲古書院)	2007	金 文京 ほか 共著
「クラシック音楽」はいつ終わったのか (人文書院)	2010	岡田暁生 著	中国宗教文献研究	2007	京都大学人文 科学研究所 編
中国社会主義文化の研究	2010	石川禎浩 編	中国美術の圖像學	2006	曾布川 寛 編
敦煌寫本研究年報 第四號	2010	高田時雄 編	ミクロ人類学の実践 ——エイジェンシー／ネットワーク／身体 (世界思想社)	2006	田中雅一・ 松田素二 編
帝国とアジア・ネットワーク ——長期の19世紀 (世界思想社)	2009	籠谷直人・ 脇村孝平 編	江陵張家山二四七號墓出土 漢律令の研究 (朋友書店)	2006	富谷 至 編
人種の表象と社会的リアリティ (岩波書店)	2009	竹沢泰子 編	日仏交感の近代——文学・美術・音楽 (京都大学学術出版会)	2006	宇佐美 斉 編著
フェティシズム論の系譜と展望 [フェティシズム研究1] (京都大学学術出版会)	2009	田中雅一 編	雲岡石窟 遺物篇 (朋友書店)	2006	岡村秀典 編
敦煌寫本研究年報 第三號	2009	高田時雄 編	三教交渉論叢	2005	麥谷邦夫 編
近代京都研究 (思文閣出版)	2008	丸山 宏・ 伊從 勉・ 高木博志 編	中国文明の形成 (朋友書店)	2005	小南一郎 編
敦煌寫本研究年報 第二號	2008	高田時雄 編	身体論のすすめ (丸善株式会社)	2005	菊地 暁 編
満州——記憶と歴史 (京都大学学術出版会)	2007	山本有造 編	人種概念の普遍性を問う ——西洋的パラダイムを超えて (人文書院)	2005	竹沢泰子 編
敦煌寫本研究年報 創刊號	2007	高田時雄 編	明治維新期の政治文化 (思文閣出版)	2005	佐々木克 編
			国家形成の比較研究 (学生社)	2005	前川和也・ 岡村秀典 編

人文科学研究所の個人研究と共同研究の成果は、多くの新知見に満ちた著作として公刊され、人文学の発展と普及に貢献している。共同研究班による成果は、論集としてまとめられることが多いのに対し、個人研究の成果は、単刊の学術書のほか、個別のテーマをさらに掘り下げ、一般読者向けにわかりやすく解説した書物として刊行されるものも少なくない。どちらも新たに拓かれた知の地平を社会に還元し、共有して行くうえで、重要な役割を担っている。



小関 隆 (著)
『徴兵制と良心的兵役拒否』
—イギリスの第一次世界大戦経験—
人文書院 2010年9月

戦時下のイギリスにおける徴兵制導入と運用の経緯をたどりながら、良心的兵役拒否者たちの葛藤を描き出す。人文研アカデミーの連続講義を基にした「レクチャー 第一次世界大戦を考える」シリーズの1冊。続刊として岡田暁生『クラシック音楽』はいつ終わったのか?、久保昭博『表象の傷』、山室信一『複合戦争と総力戦の断層』などがある。



安岡孝一・安岡素子 (著)
『キーボード配列 QWERTYの謎』
NTT出版 2008年3月

タイプライターの QWERTY 配列は、どのようにして決まり、どのように普及した結果コンピュータのキーボードに採り入れられたのだろうか。そして「タイピストがなるべく打ちにくいようなキー配列」なんていうガセネタを最初に流したのは誰で、このガセネタはどう広まっていったのか。本書はこれらを明らかにすべく、1840年代から1980年代まで、約140年間にわたる歴史の旅をする。



金 文京 (著)
『三国志演義の世界』[増補版]
東方書店 2010年5月

『三国志演義』の叙述スタイルや成立事情、作者羅貫中の人物像、登場人物のキャラクターの変遷など、奥深い作品世界を案内する。また20世紀になって発見された『花関索伝』や明清代の書坊による出版戦争、『演義』に反映された正統論や五行思想など、物語の背後にある文化や世界観も描き出す。増補版は、日本と韓国における「演義」受容の様相についての一章を新たに加える。



富谷 至 (編著)
『東アジアの死刑』
京都大学学術出版会 2008年2月

究極の刑罰、死刑に焦点をあて、東アジア世界の法制度、法習慣、法思想、法社会学、法と宗教を総合的に考究した論集。日本・中国・オランダ・スウェーデン・イギリスの、歴史学・法律学・社会学・人類学からなる国際共同研究の成果である。罪と罰の法意識を学際的かつ実証的に研究した諸論は、死刑問題の根源、今日の社会問題の解明に貢献する。



丸山 宏・伊従 勉・高木博志 (編)
『近代京都研究』
思文閣出版 2008年8月

本書は、丸山宏・客員教授を班長とする「近代京都研究」班(2003~2005年度)の共同研究の成果である。「近代の歴史都市としての京都」について、特殊性と普遍性を射程に入れ、歴史学・建築学・美術史・造園史・地理学などから総合的に論じている。姉妹編として『京都新聞』での連載にもとづく一般向けの読みもの『みやこの近代』(思文閣出版)がある。



山室信一 (著)
『憲法9条の思想水脈』
朝日新聞社 2007年6月

第11回司馬遼太郎賞受賞作。憲法9条は戦後一方的に「押しつけ」られたものではない。人類の歴史のなかで戦争が繰り返される一方、平和を求める声も途絶えることはなかった。本書は日本において、幕末以降、軍備撤廃を論じ戦争廃止を訴える思想が現れ、それらが第一次世界大戦後の「すべての戦争の違法化へ」という世界の動きと合流していく過程を描く。



講演会・人文研アカデミー

本研究所においては従来、定例の公開講演会として、開所記念講演と夏期公開講座を開催し、また年度末に定年退職となる所員がある年には定年退職記念講演会を行ってきた。夏期公開講座は毎年7月初旬の週末、3名程度の講師が統一テーマのもと、主として一般市民を対象に行われている。

2005（平成17）年度4月にはこれらに加え、共同研究班の最新成果にもとづく「共同研究セミナー」、「レクチャーコンサート」、タイムリーなトピックを討議する「特別シンポジウム」など、人文科学研究所が行う一連の講座、講演会等をまとめて「人文研アカデミー」として再編した。年間30回近くにおよぶ講座、講演会を通じ、研究所の研究成果の公開という従来の機能をさらに充実させるだけでなく、学内他部局や学外組織とも連携しつつ、大学という枠を越えた新たな情報発信、社会貢献の道を創出している。

2010（平成22）年度

4月7日、6月2・30日、7月7日、8月4日、9月1日

高階絵里加

「名画の見方・読み方——印象派とその時代」

（共催：NHK大阪文化センター）

4月17日

菊地 暁、飯田 卓、佐藤知久、河合香史

「シンポジウム 人類学の誘惑——京都からの回顧と発信」

（共催：京都市人類学研究会）

5月6・13・20・27日

浅原達郎

「中国近代の通俗小説を読む」

6月3・10・17・24日

大浦康介、近藤秀樹、塩瀬隆之、久保昭博

「連続セミナー フィクション論の諸相」

7月3日

富谷 至、籠谷直人、永田知之

「夏期公開講座 名作再読——いま読んだらこんなに面白い5」

9月24日

大浦康介、菊池 暁、礪波 護、藤田正勝

「京都学派の巨人たち」

（共催：京都市生涯学習総合センター）

9月30日

石川禎浩、中村史子、韓 燕麗、小野寺史郎

「連続セミナー 現代中国——そのイメージ」

11月25日

嘉勢太務、久保昭博、岡田暁生

「レクチャーコンサート モダンジャズ入門」

2009（平成21）年度

4月16日、5月21日、6月18日、7月16日、8月20日、9月17日

幡鎌一弘、黒岩康博、高木博志、小林丈広、岩城卓二、原田敬一

「歴史の中の三都物語——近世～近代の奈良・京都・大阪」

（共催：NHK大阪文化センター）

5月20日

デイデイエ・ガラス、大浦康介

「ラブレター独り芝居『借金礼讃』」

（共催：関西日仏学館）

6月2日

岡田暁夫、片山杜秀

「特別対談 21世紀の音楽批評を考える」

7月4日

藤原辰史、稲葉 稔、富永茂樹

「夏期公開講座 名作再読4——都市」

9月4・11・18・25日

武田時昌、藤田明良、降矢哲男、山崎 岳

「鎖国前夜の日本」

（共催：京都市生涯学習総合センター）

10月8・15・22・29日

樺山紘一、小野和子、松原正毅、熊倉功夫

「連続セミナー 人文研80年——人文学の過去・未来・現在」

11月5日

加藤秀俊、鶴見俊輔、礪波 護、松尾尊兌

「創立80周年記念シンポジウム 共同研究の可能性——人文研80年の回顧と展望」



2010年11月のレクチャーコンサート



11月12・19・26日、12月3・10・17日

立木康介
「ラカンを読む」

2010年3月18日

「田中 淡教授 退職記念講演会」

2008 (平成20) 年度

4月17日、5月15日、6月19日、7月17日

金 文京、宮宅 潔、永田知之、岩井茂樹、石川禎浩
「時代を生きた女性たち——中国編（楊貴妃から江青まで）」
（共催：NHK大阪文化センター）

4月15・22日、5月13・20・27日、6月3日

田辺明生「theory/practice ヨーガの理論と実践」

6月5・12・20・26日

田中雅一、妙木 忍、西村大志、岡田浩樹
「共同研究セミナー 身体=フェティッシュをめぐる技術——強壮剤、
人体模型、サイバースタット」

7月5日

藤井律之、伊藤順二、高田時雄
「夏期公開講座 古典再読——いま読んだらこんなに面白い3」

7月19日

東 浩紀、ミカイル・クシファラス、g 新部 裕
「特別シンポジウム いま著作権・知的財産権問題が問いかけるもの」
（共催：人文学国際研究センター）

7月26日

菊地 暁、北原 恵、表 智之
「ジュニアアカデミー イメージを読む作法——写真、漫画、そしてド
キュメンタリー」（共催：京都大学総合博物館）

10月9・16・23・30日

稲葉 稔、向井佑介、下垣仁志、菱田哲朗
「共同研究セミナー アジアの仏教遺跡を掘る」

10月16日、11月20日、12月18日、2009年1月15日、2月19日

王寺賢太、小関 隆、田中祐理子、久保昭博、藤原辰史
「時代を生きた女性たち——ヨーロッパ編（マリー・アントワネットから
レニ・リーフェンシュタールまで）」（共催：NHK大阪文化センター）

11月18日

岡田暁生、小坂圭太
「レクチャーコンサート 第一次世界大戦のあと——狂乱の1920年代
（カウエル、ゴドフスキ、ソラブジ、ガーシュインほか）」

11月20日

田中祐理子、矢木 毅、三山 陵
「開所79周年記念講演会」

12月5・6日

竹沢泰子、エラ・ショハット、トロイ・ダスターほか
「第12回京都大学国際シンポジウム 変化する人種イメージ——表象
から考える」

2009年3月19日

「曾布川寛教授退職記念公開講演会」

京都大学
人文科学
研究所 要覧

2010

人文科学研究のフロンティア

2011年 3月15日 印刷

2011年 3月20日 発行

非売品

編集・発行 京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
Phone 075-753-6902

編集協力 木村 滋

デザイン・DTP 柴永事務所

印刷 株式会社公栄社

©京都大学人文科学研究所 2011

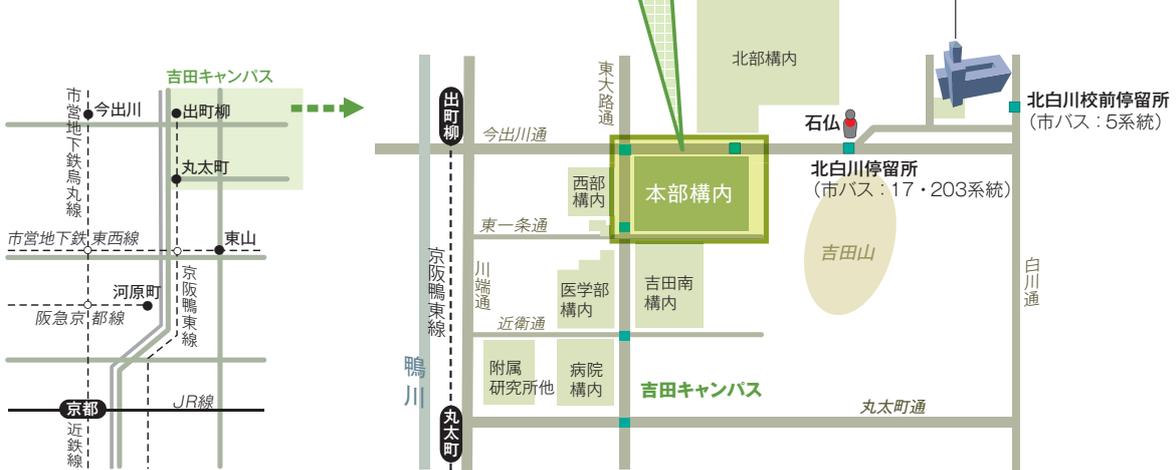
*無断転載を禁じます



本館
人文科学研究所本館
 (総合研究4号館)
 〒 606-8501
 京都市左京区吉田本町
 Phone:075-753-6902
 Fax:075-753-6903
 E-mail:annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
 http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

分館
東アジア人文情報学研究センター
 〒 606-8265
 京都市左京区北白川東小倉町 47
 Phone:075-753-6997
 Fax:075-753-6999
 E-mail:annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
 http://kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

本部構内



本館へのアクセス

- 市バス 京都駅 (JR・近鉄) から**
 17系統 河原町通・錦林車庫行「京大農学部前」下車
 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
- 河原町駅 (阪急) から**
 3系統 百万遍・北白川仕伏町行「百万遍」下車
 17系統 河原町通・錦林車庫行「京大農学部前」下車
 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車
 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車
- 今出川駅 (市営地下鉄) から**
 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車
 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
- 東山駅 (市営地下鉄) から**
 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車
 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車
 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
- 出町柳駅 (京阪) から**
 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車
 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
- 徒歩** 出町柳駅 (京阪) から 徒歩約15分
 丸太町駅 (京阪) から 徒歩約20分
- タクシー** 今出川駅 (市営地下鉄) から 約10分、800円くらい

分館・東アジア人文情報学研究センターへのアクセス

- 市バス 京都駅 (JR・近鉄) から**
 5系統 岩倉操車場行「北白川校前」下車
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
- 河原町駅 (阪急) から**
 5系統 動物園・岩倉操車場行「北白川校前」下車
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 今出川駅 (市営地下鉄) から**
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 出町柳駅 (京阪) から**
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 徒歩** 出町柳駅 (京阪) から 徒歩約25分
- タクシー** 今出川駅 (市営地下鉄) から 約15分、1000円くらい
 出町柳駅 (京阪) から 約10分、800円くらい

Institute for
Research in Humanities,
Kyoto University

